

# 太 棹

昭和十八年八月廿三日 印刷  
昭和十八年八月廿五日 發行

(每月一回  
廿五日發行)

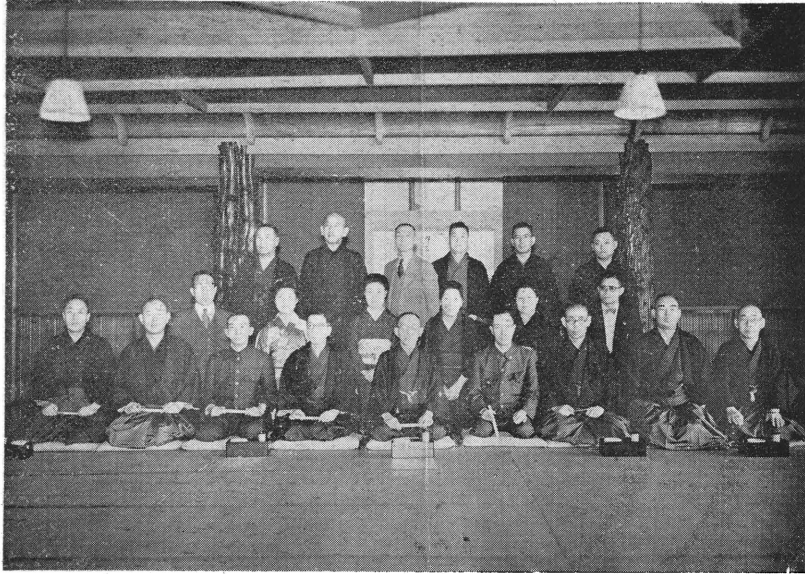
太 棹 (第百四十六、七號合本)



第百四十六・七號合本

大正我茶屋坊  
信友

鶴澤絃平師をかこみて  
二代目野澤吉郎を襲名する



鶴澤絃平師は竹本住太夫師の仲介にて野澤吉彌師の門下となり二代目野澤吉二郎を襲名する事になつて、絃平師連中一同並に東都五十義會々長細川清氏出席の下に六月廿七日大森「三芳」に於て師弟の盃を交はしたが、師は大坂日本因協會にも復歸し進てこれが披露會を催はず筈である。寫真前列向て右より島うつば、和田春和、細川清、竹本住太夫、野澤吉彌、鶴澤絃平、野澤稻丸、田中呑笑、杉本花房。中列 同小林隅斗、菊地菊水、千振千年、秋本ひばり、中川せつ子、菅豊國。後列同笠原善三、東都、坂本あるを、上杉文盛、沼井盛鶴、柳澤吾鈴の諸氏。

風流・金ぶら・茶漬

(美地句)

去月屋

新橋二ノ八  
電話二〇八

席貸

並木俱樂部

浅草・雷門  
電話浅草二二三五番

御禮

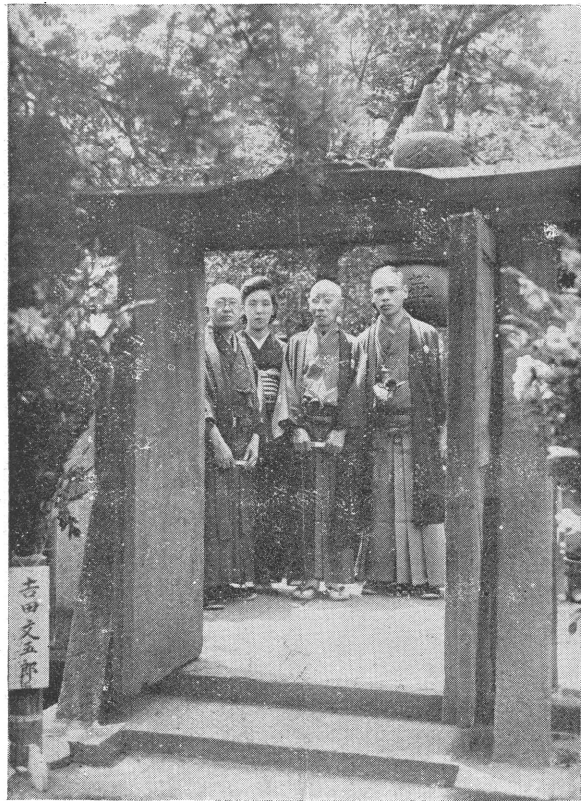
東京臨時第一陸軍病院 本棹一六七號  
五 十 冊  
東京臨時第三陸軍病院 同三十冊

寄贈者 齋藤金太郎氏

右弊社の趣旨に賛同せられ傷痍將士慰安として御寄贈を賜り候段難有奉深謝候

太 棹 社

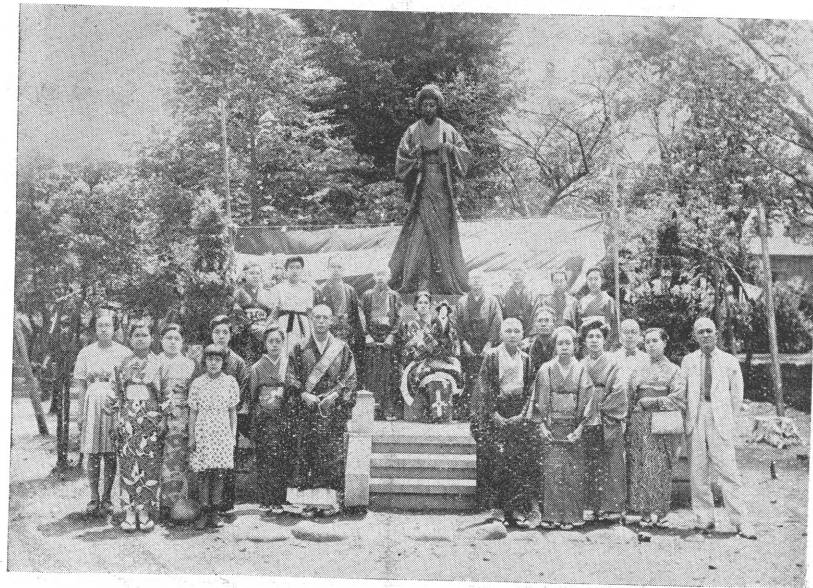
誠忠淺岡の供養局(その二)



寫眞(その一)ノ前列向つて右より齋藤光司、竹本住世子、林正樹、竹本綾之助、鶴澤清一、山田義昇、井上和風、住職、吉田文五郎妻女、齋藤夫人、東金枝、左端 東金昇、小島よれ子、森野ゑみ子。後列同右より 東金吾、東國之丞、吉田國五郎、齋藤山生、政岡の人形を持つ東金之丞、吉田文五郎、桐竹龜松、東金彌、東金三郎の諸氏。

寫眞(その二) 向つて左より齋藤山生、同夫人、吉田文五郎、桐竹龜松の四氏。

誠忠淺岡の供養局(その一)



伊達騒動で知られた誠忠淺岡の局(政岡事三澤初子)の法要を兼ねて賞演の會が大日本淨曲協會後援の下に、その菩提寺たる正覺寺の主催にて七月廿五日午後一時より同寺に於て住職池田是淳師外十名の僧侶の讀經大供養が行ばれた後、日本淨瑠璃國演會に依つて賞演會が催はされた。

墓碑は貞享三丙寅稔の建立にて史蹟として同寺の墓地にあり、戒名は「淨眼院殿了獄日嚴大姉」たほ此の墓碑に隣りて両親の墓碑もある。銅像は境内の廣地にあり、吉田文五郎丈は「永年政岡の人形を遣つてゐますが、墓碑が東京にあるとは知りませんでした、今度初めて参詣させていたゞいてこんなに嬉しい事はありません、これも永生きのお蔭で難有い事です」と、銅像の下で非常に喜んでゐた。當日の番組左の通り。

佛教と淨瑠璃(池田是淳)、淨瑠璃と日本精神(柳原義光)……鳴戸(染登、佳照)、先代前(和風)、奥(山生)、絃(清一)、人形役割(お弓、金彌。お鶴、金枝)(政岡、金之丞。八汐、國之丞。榮御前、金吾。鶴千代、金枝。千松、金彌。沖の井、金昇。小牧、金三郎)。



坂本あるを氏は第卅八回東都五十義會に於て西大關を獲  
得し、その榮譽記念の祝賀會を七月十二日並木俱樂部にて  
開催。(本文記事参照)

寫眞前列向て右より沼井盛鶴、豊澤猿之助、星野桔梗、  
鶴澤絃平、坂本あるを、竹本路太夫、中澤巴、和田春和、  
島うつば、杉本花房。中列同鶴澤絃吾、宮崎其柳、原田越  
巴、平山平茶、山崎力、高光吳光、三並義昌、豊澤猿三郎  
吉田登盛、中川せつ子、島春榮、菊地菊水。後列同 及川  
旭、西西喜、水野昇、田中吞笑、的野關路、鶴澤新造、桑  
原美峰、黒川叶夫君、竹本彌鈴、柳澤吾鈴、太棹子。

## 太棹 第四百六十六・七合本目次

表紙・カツト……………齋藤清二郎

口繪……………  
▼二代目野澤吉二郎を襲名する鶴澤絃平師をかこみ  
て▼誠忠淺岡の局供養▼坂本あるを氏大關披露會

師弟道……………紅雨莊主人(三)

東上の文樂座(一)……………齋藤拳三(八)

端場の研究……………川口子太郎(五)

文樂の若手……………土門拳(三)

忠臣藏スバイ合戦……………伊藤紅二(四)

女義短評……………内田三千三(六)

消息・會報……………(一八)

空の旅(河野國聲)綾秀會より(傍島出雲)靜岡よ  
り(戸塚喜三香)三好會(森三好)濱松より(佐藤  
和聲)小樽より(豊澤廣助)

太棹社彙報……………(三一)

當座帖……………

編輯後記……………富取生



## 師弟道

紅雨莊主人

◇私の中學一年の時に、羽生東洋といふ國文の先生が居て、修身を受持つて居られた。東京の人で、色白の瘠形の人であつたが、東洋は雅號で、今でいふ大東亞主義の、見掛けに似合はぬ熱血兒であつた。四十何年も前に大東亞の思想を抱いて、雅號迄も東洋と云ふやうな、國文の先生に似はぬ平俗な字を厭はず附けたなどは先覺者と云へるが、其頃はさう云ふ

氣持の人も尠くなく、今一人の、一寸名を忘れたが、これも温健らしく見えた國文の先生が、何かの時に或國語の意味の説明として、下手な字で英語を黒板に書いたが、生徒の苦笑に氣がついたか、見る／＼眞面目な顔になつて、諸君はどう云ふ氣持で英語を習つてゐるかと云ふやうな事を云ひ出し、聲を勵まして、英語を勉強するはよし、但し「敵愾心」を以て勉強して貰ひたいと、厲聲一番した。國語が馬鹿にされ、英語が重んぜられるからあんなことを云つてゐる位に生徒は聞いてゐたが、東洋先生はそれ以上で、修身の筆記をするのに鉛

筆などを使はせず——萬年筆は當時は珍らしい道具であり、ペンには中學でも英習字などの外使はなかつた——兎の毛を入れた墨壺を持つて來させ、心書きの毛筆で半紙を綴じたのに書かせた。

◇東洋先生の講義の内最も困難らしかつたのは「師の恩」といふ事であつた。中學の先生の仕事が學問の切實である事は當時も今も變りはないので、此頃急に文部省で云ひ出した鍊成とか躰とか薰陶とか云ふ事を、當時已に教育の本道と考へてゐた東洋先生と——當時已に、ではない、其頃から——んな思想が無くなつて了つたのである——時間制、學科別、講義制、教師の月給制度など、皆く調和せず、師の恩の話がこぢつけのやうな感じを興へたのは止むを得ない事であつた。

◇それでも講義のあと、生徒は先生の質問に神妙に答へてゐた。實はよく分らぬが、先生が氣を悪るくせぬやうに、恐る／＼、遠廻しに、外交辭令を以て答へたので、難關は、生徒

が月謝を拂ひ、先生が月給を取つて居るといふ事と、師に恩があることと云ふ事との連絡であつた。中に山本と云ふ、どこにでも一人や二人居るやうなズバ／＼物を云ふ生徒が居て、初めのうちは皆く云つてゐたが、月給の段になつて、それでは先生が食へんからとやると、東洋先生面喰つて、ソ、其れはいけません！

◇昔の「師」でも束脩だの月謝だのは取つたらうが、學問の種類が少く、就く先生の数が少いから自然個人的に薰陶せられる事になり、ことに學問の内容が、文武何れにしても今時より一層精神的要素を中樞とするから、師弟の關係が取引關係でなく人格關係になつてゐたのであらう。日本獨特の學校騒動などは、大抵は取引の相手から人格を求めて得られぬ爲であり、昔の制度の殘滓であると思はれる。師弟關係のもつと家庭的で、そして無報酬なのは一層情誼濃やかで、今日でも漱石先生とか、紅葉先生とか云つて襟を正したり、なつかしがつたりするのは、大抵玄關番でもしたとか、又は始終出入りして物を教はつたり、指導を受けたり、家庭的に、又は對世間的に、何かと世話を受け、恩顧を蒙つたと云つたやうな關係であらう。今日では、報酬を拂ふのは當り前で、取るのも當り前で、あとは師弟の接近から來る情誼、と云ふ位の關係になるが、今日でも恩師とか、愛弟子とかいふ言葉が、滿更盛でも無く使はれて居るから、師弟の關係必ずしも悪い

とは云へぬ。

◇學問が主として「頭の」鍛錬である結果、師弟の關係は幾ら親しいと云つても親しさに限度があり、所謂六尺去つて師の影を踏まずとなるが、技藝となると身體とか手足とか、喉とか云つたやうな事になるから、例へば武道の師でも先生と打つ合つたり取つ組んだり、職人などは狭い家で親方と起居を共にし、夫婦喧嘩も見たり、たまには布子を質に入れたりしたりする關係になり、藝道となると、それが一層接近して例へば淨瑠璃で云ふなら、師匠の家に居て下男同様に立働きの世話から、飯の給仕、酒の酌、走り使ひ、お小姓のやうに便所に迄付いて行つて、待つてゐて手水を掛ける。團平といふ人は酒飲みで、場所がはねてから宿屋に歸つてそれから緩くり酒が始まる。二三人の弟子が給仕をするのだが、盃を嘗め／＼藝談をして一時二時に及ぶ。一寸聞くとそんな難有い事が有らうかと思はれるが、何しろ毎晩なので落伍者が出來て來、脇の者が、一寸腹痛で、など取なすといふ風であつた。力松といふのが（今のでなく、も一つ前の）目に入れても痛くない程の愛弟子で、當時まだ子供だつた私の目には大きく見えたが、十七八でともあつたか、それが師匠の出演中樂屋で蒲團を着て寝てゐたと云ふので、珍らしく腹を立て、若い者だから居眠りをする事もあらうが、床に上つて居る時

は師匠も一生懸命で、いつ何時卒倒せぬとも限らぬ、其時舞臺に飛び上つて師匠に代るのが弟子の役ではないか、それが蒲團を着て寝てゐるとは、つい不覺に居眠つたのでなく、藝道を軽んずる結果である、破門すると云ひ出して怎うしても納まらず、其時の力松は文字通りの青菜に鹽で、外の弟子達もお悔みにでも行つたやうに言葉少なに爪立てをして、あちこちしてゐた。恐らく團平は、力松といふ自分の前名をやつた程可愛くて堪らぬ弟子が、自分の出演中寝てゐたのが涙が出る程腹が立つたのであらう。力松も師匠に破門せられては將來藝人として立てぬと云ふやうな利害問題などは意識に上らず、たゞ師匠、ことに團平師匠から破門せられるといふ事が女房去つた縁切つたぞと同じで、たゞそれだけで死んだやうになつたのであらう。師匠も弟子も親子か主従のやうな關係と情愛に結ばれてゐたのが當時の師弟の關係であつた。

◇されば弟子の師を視る事主の如く神の如く、師匠が何々と仰せられた、かく云ふものぞと教へられました、私はあの師匠を師匠とした事を無上の名譽と思ひ、師の一語一句其儘を辛うじて傳へるのが、弟子たる者の役目であり榮譽であります、と云ふやうな態度を取るやうになるので、彌太夫が師匠長門太夫を神の如く敬ひ、親の如く慕ひ、高座で使つた痰と鼻汁でコチ／＼になつた汚い手拭を、身の寶と計り座右に置いて押頂いたと云ふのもそれである。文壇でも、例へば泉鏡

ありとすれば、當面の小問題の當否は別とし、少くともかゝる廣大なる傳統のバック、それに基く美しい師弟道といふやうな、淨瑠璃道の背骨に對する無理解を示す者である。津太夫が大日本淨瑠璃太夫協會（大日本淨曲協會の前身）の發會式に、素人に稽古の一方を説き「これぞと思ふ師を選んだら、絶對批評をせず、教へる通りに一から十まで覺へよ」と云つたのは、少くとも當分師の藝の批評などする力はつかぬと云ふやうな通俗の意味や、津太夫自身頭の無い無器用者だといふ意味などではなく、かくせねば藝は分らぬ、これが傳統の藝の習ひ方であるといふ意味であつて、これ亦前に述べた見地から見ぬと分らぬのである。何太夫様がかく仰せられたと襟を正すのは、自説を辯護する爲めに何太夫曰くと人の説を引證するのでは無く、自分より高い藝位にある人の藝に身を浸してゐるのである。或はそれが間違つて居るかも知れぬ。しかしその當否は更に高位の藝位にある者のみよく判定し得るとするのである。此點、ウキスキー氏曰く、ブランド博士曰く式の、傍證の借物を集めて學術論文をでつち上げるのなどは、大凡違つた世界なのである。

◇此事は、藝の創造性と怎ういふ關係になるか。藝術の生命は創造にあり、人の眞似では、たとへそれが師匠の偉大な藝の眞似であつても、嚴格な意味で藝術と云ひかねる。染登を中心とする女藝の勉強會の命名を贈まれた友治郎が、鸚鵡會

花が師紅葉に對する氣持などは之に近いものであり、最上級の敬語を使ひ、自らを卑稱して、われら弟子輩と呼ぶ所、單にそんな癖だとか趣味だとか云ふのでなく、本當にさう思つてゐたに相違ないので、當時の師弟の地位境遇といふ事の外に、志を得ぬ鏡花が文士を諦らめて歸國しやうとした時、紅葉が激勵の手紙をよせ、爾は珠玉なり、寶石なり、志を捨てると云ふ事があるかと云つて、自分も不如意乍らと金五圓を惠んだ事が若かりし鏡花を感激させ、一生の守本尊となつて此不世出の天才を大成させた。

◇こう云ふ話を書く、新派の芝居のやうに思ふ人もあらうが、藝の修業は心と肉體との双方であり、師の懷ろに飛び込み、師の體温を感じ、自己を捨て、異身同體になり切ると云ふ事が、藝能、ことに鍛鍊の藝、傳統の藝、型の藝の習得の本道であつて、何世紀かに一人出るやうな大天才は別とし、普通の何萬人はかくして師の藝の眞髓に觸れ、之を會得し、之を傳へて、今日吾々の見るやうな、例へば淨瑠璃があるのである。蓋し、藝の眞髓は、智識ではなく、潛心鍛鍊の結果到達し得る鋭い「勘」であるからである。

◇「何々太夫様はかく仰せられましたから、私もさう語つて居ります」といふやうな態度は此見地から見ればききものであつて、何太夫だらうが何兵衛だらうが、理窟に違つてゐるものは違つて居る、いけないものはいけないなど、一口に云ふ人と付けたのは、鸚鵡の人眞似ではまだ藝とは云へぬといふ皮肉で、此點どの藝術でも同じだといふ事になる。併し、藝の創造とは、單なる思ひ付きや、頭だけででつち上げた新工夫などであつてはならず、高い藝位から出て、しかも其藝術の到達してをる高度の技術を以て表現されたものでなくてはならぬ。或美術雜誌の栖鳳追悼號で松園が、「師の藝に深くも直參せず、祇に基礎も出來ぬのに、自分勝手な工夫で畫を描くから、此頃の新畫のやうなものが出来上る」といふ意味を云つてゐる。同じ雜誌の外の號で關雪が、年期を入れぬ藝の貧困を説いてゐる。何事も同じと見える。油畫でも立派な基礎的の技術を持たずにフォーヴの眞似などしたものは見るに堪えぬのである。

◇藝の創造が一足飛びに行かぬとすれば、そこに色々の階段が考へられる。先づ師匠の藝に直參して、師匠の持つて居るものを一應相續するのが第一の順序となる。普通の氣根の人の到達し得る最高極度は恐らく此邊であらう。それにしても若し其人が純眞に藝に打ち込めば、其人の持前が出る筈であるから、一種の持味が附くわけである。師匠の藝に直參するのは師匠の口眞似や師匠の聲色を使ふのではなく、師匠の歩く道を踏んで師匠の到達してゐる藝域に入らんとするものである。無論師匠を尊び、其藝に傾倒すれば、聲迄が似て來、師匠丸寫しになる程やらねば徹底せぬ事、丁度書をやる人が

臨書をして、手本と區別が附かぬ位にやるやうなものであるが、一體眞似の出来る事にさうよい事は無い筈であつて、本當によいものは眞似が出来ぬ事、團十郎そっくりの役者や、大掾丸寫しの太夫が居らぬのを見て知れる。丸寫しは、旨く出来れば出来る程藝では無くなるし、本當に丸寫しの出来る藝なら藝としての高さも知れて居るとなる。従て丸寫しは手段であり、道中であつて、目的でもなく彼岸でもない。そこを突きぬけて、始めて師匠と別な藝が出来、師匠を凌ぐ藝ともなる。藝術の種類にもよるとして、栖鳳と五雲、雁次郎と扇雀、等に對して、榎嶺栖鳳の兩師と、松園、法善寺の津太夫と古觀太夫、などが、一つにも出来まいが、何となく比較される。

◇少し藝の話に深入りし過ぎたから、話を師弟の事に戻して、さて、問題は將來である。彌太夫や泉鏡花がまだ出るであらうか。伊達太夫は師土佐太夫の事を語ると泣くとか云ふ。少くとも土佐太夫の可愛がり方を考へれば、親とも思ふのに無理は無いと思はせる。新左衛門が師松太郎の葬式の時、實子の猿之助も顔負けする程おろ／＼泣いたといふのも、故師の知遇の如何なるものであつたかを聞いて見れば、さもあるべき事と思はれる。しかし、稽古を勵むといふ事よりも切符を賣る事の方が大切になつた今日としては、重點の取り方が違ふ計りでなく、淨瑠璃の古典扱は形體上の事で、内容は銘々

打になつてゐなくては不可能であらう。平たく云へば、弟子は頭の禿げる頃まで下男小者の境遇に辛抱出来、師匠もそんな弟子の二三人も置くだけの餘裕があり、弟子がいよいよ師匠の名でも變ぐ時には相當の、具體的に云へば、少くとも所得税何千圓かを拂ふやうな収入になり、云はゞ男子一生の野心的になり得る状態なくては、かゝる捨身的の打ち込み方は六かしいと思ふ。早くから羽織でも着、年頃には女房も持ち、子供も出来、勉強よりも切符を賣らねば役がつかず、幹部になつたとて収入は大した事なく、藝は新聞や雑誌が勝手に小突き廻し、聲でも奇麗でお座敷でも續くか、金持でもパトロンになつてくれれば格別、早くから連中でもこしらへて未熟な藝の切賣りでもせねばやつて行けぬとあつては仲々六かしい。此點謡曲などは家元があり、恒産があり、藝は寧ろ素人のものであり、そしてその素人が大衆パトロンであると云ふ強い意味がある。此點を展開すれば、淨瑠璃の將來と云ふやうな問題に觸れて際限がなくなるが、そこに宿命的な矛盾があるやに思はれる。何れにしても、筑後のやうな大偉人でも出ない限り、淨瑠璃は矢張り今在るやうな古典性を維持せねばならず、今在るやうな古典性を維持する爲めには、それを古典として今日に傳へ得たやうな方法によらねばならず、それは昔のやうな意味の師弟道も或程度迄維持されねばならぬと云へやうが、同時に昔の師匠は偉らかつたといふ事實もあり、その偉さも礫の中に筍の生えたやうなのでなく、群嶺の重疊を抜いて天に沖する式のだから容易に近づけぬといふ事もある。責任有る結論は容易でないから、今は昔の師弟道を通じて、淨瑠璃と云ふ藝が如何なるものであるかの一端を瞥見するに止める。(十八年六月稿)

勝手に考へ始めた傾向があり、傳統藝としての細部に對する世間の耳も段々疎くなり、之に代る評論家が權威と、時には恐怖を以て、其お手製の好みを押しつけんとする等、最早師匠の懐に入り、體温を感得する事に大した意味が無いといふやうな形勢と見られる。無論何技藝でも、師匠の達した所迄達するには、師匠の胎内に這入り、師匠と一體となつて、内から藝を見ねば徹底せぬ譯であらうが、出たとて勝負のやうな浪花節や、云はゞ口から出まかせの漫才、何々笑劇、映畫の多くといふ風な、苦心は有つても修業鍛錬といふ程の品物でないのが歡迎せられる時世には、随分無駄な骨を折る事になる。宴席でも十年二十年の名取藝は顧みられず、怪しげな歌謡曲や、レコード相手の小唄振りなど、云ふ安物が喝采を博するのを見れば、古典藝として發達し過ぎた大企膜の此藝が、いつ迄今の形を保てるか、新時代に即應する日になると第一、三味線の手と云ふものが厄介なものになり、最早ウレヒのツボで人形に合はせて泣くフシなどでは時代錯誤になると云ふ工合で、結局浪花節でも改良した方が、新興語り物としてははまり易い事になるかも知れず、現にさう云ふ事が座談會などでちよい／＼云はれて雑誌などに載つて居る。

◇要するに前に例示したやうな師弟道は、藝の傳統性が強く修業練磨のみが物を云ふ藝でなくては維持出来ず、しかも、かゝる藝自身の性質の外に、社會狀勢が、經濟事情が、其裏



# 東上の文樂 [一]

## 齋藤拳三

新橋演舞場の文樂は開場前大半の前賣切符を賣り切り、すぐ十日間日延べと云ふ空前の盛況である。外にガダルカナル島、アツツ島の悲報に胸を打たれる時、内には旅行の足をとられ、飲料の口を封じられた人々の、人形を單なるスペクタクルとして味ふ行列を見る、多少の感なきを得ない。西尾福三郎氏は本誌前々號で文樂の品質低下を憂うる卓見を述べてる、安易に紙芝居を見る程度の文樂の新定連に、太夫も人形も満足して居るとしたら、現下の非常時局に安心して自己の職域に精進し得られる幸福な境遇に對して、藝能人は全く申譯ない次第であらう。現在の如く何を演つても見物の來る時こそ、興行主も藝能人の育成を心がく可きであらう。先づ手近の具體案として第一に五日變りを七日變りに改める事、第

二に太夫三絃の一日變りを斷然やめる事を提唱する。即ち前者は日曜日以外に休日を持たぬ人に機會を與へ、亦物資不足の折から多少なりとも背景及び人形衣裳の節約ともなり、人形作製の過勞を緩和し得ると思ふ。後者に至つては只さへ練習不足なき太夫、三絃を苦しませる以外何等の功果もなき一日變りを全廢して、語り物に精進させたいのである。組見のある日に比較的良き方の語り場を與へるなどは、これを目あてに入場した見物には大層な迷惑で、大坂人が淨瑠璃の聖地と誇る文樂には全く沙汰の限りである。

### 第一回

一日の任務、戰場をおへて馳せ付ける以上、どうしても時

間は六時頃になる。淨瑠璃道で傳統的口傳のある樓門は何としても間に合はない。大隅太夫の獅子ヶ城は前年同様結構で「怪我遊ばすな」の如き此の人一流の無器用な古淨瑠璃情緒を流露する。大隅太夫は餘り演りちらかさない語り物程、昔ながらの善き修業の跡が見えて嬉しい、紅流しは吉五郎の糸が結構で、弱腕も目立たず堂々として居る。人形は門造の甘輝、玉助の和藤内共によく、甘輝は始めの場の引込みが結構な動きである。錦祥女の紅流しは日吉丸の五郎助や新薄雪の兵衛の如く陰腹の呼吸で行くべきもので、手負丸出しの人形の演出は誤りである。和藤内が橋桁をはずして其れを持つて荒れ込む型も文三など演らなかつたもので、現玉藏以來の新演出の由、研究ものである。

古藪太夫の寺子屋は「机の数が一脚多い」を獨り言の様云ふのと「野邊の送りいとままん」の後呼吸で泣いて「あいと返事」と出るのが實によく通るのが今度の進歩である。が演舞場の大きさを計算して角々まで聲を通そうとする神経質から語り過ぎて延びると、キバツて節尻だけが大きくなる爲非力に聴へるのは惜しい。文樂否、日本の義太夫節を一人で背負つて立つて居るカケ替の無い貴重な太夫である、藝術至上主義一點張りに楽しんで語つてもらひたい事を切に望んでおく。

榮三の松王は「首打つ音」で刀を落す型だが、文五郎の千

代と共に結構なものだ。源藏と戸浪はガク落ちである。龜松の源藏は左の門造がもつと教へなければ駄目である。

榮三郎の戸浪は十數年來にない悪い戸浪で、他人の仕所にこそくした場當りの動きが多く、一例を挙げれば「氣弱くては仕損ぜん」で帯をしめなす悪型、「打てば響けで」亭主に玄蕃の來た事を教へる手付き、「女房千代と云ひ合せ」の邊で暖簾から覗いて見る無作法、「五色の呼吸」の悪い動き等である。人形に凝ると云ふのは決して此んな小細工をする事では斷じてない、最後の人形遣と云はれる吉田榮三の足や左を遣つて勉強して、然も最も有望と云はれる榮三郎が此の有様では心細い限りだ、榮三も一度客席から見物したら如何。

次の朝顔日記の宿屋で光造の駒澤が「茶箱でも」の件でキセルで疊をたたく腹達ひも同断である。一年に二度の久々の文樂の東上である、仙糸に樓門の糸を務めさせる事、戸浪は小兵吉に、和藤内の母は政龜に遣はせる案を建築しておく。

### 第二回

先代萩の御殿は呂太夫が前年より進歩があつてよい、一見柄にない語り場が「何にもせよ御通し申せ」の政岡の言葉など、突然の榮御前の前ぶれに對する不安がハッキリ知れて上々である。仙糸の絃は當日中の傑作であつた。「どれ」……ト「こしらやう」の間「骨も砕くる」や「花嫁御」の件



の弾き方「現在身内」の件なども老熟した味を弾いて居た。紋十郎の政岡は前年よりも長足の進歩で前半が殊によい。「雀や犬」で籠に極る件、榮御前の入り込みの前の布團を持つてのシトリとした引込みなど結構である。

門造の八汐は案外、結構なもので、千松を小雀の如くすぐ刃を突き通してしまふのはかへつて惨忍で面白い。「此れでもか」は懐紙でたゞいたが古風で良い、「其の名は」で懐剣を振り上げて政岡と極る處は「和田すみの」で極りと共に人形劇獨特の面白味である。「大事のたくみ」の思入れも肉輪でいい。歌舞伎では八汐が一番上手な手に人形は政岡、榮、八汐、仲の井の順なのも参考に記しておく。

龜松の榮御前は「指圖有らん」で両手で頂く様な形をするのも「必ず悟られまいぞや」で、八汐の肩を敲くのもおかし、人形芝居の動作は簡素、稚拙である事が第一の要素である事勿論であるが、其れは淨瑠璃の文句とかけ離れた馬鹿々々しい動きをしると云ふのでは決してない。頭のない大夫や人形遣が傳統を究めずして独自の演出をする事の危険、有害が古典藝術を亡ぼす第一歩である以上、愛好者は見物席から嚴重に監視しなければなるまい。

古靱大夫の油屋は東京人には封切りものである、故組大夫が「喜助か何の用」の如き平凡な箇所を客を唸らせた妙技は知らぬが、筆者は、故源大夫、鍛太夫、和泉大夫と聴いて居時、二三次團扇で顔を隠したのを記して置く。前者は若手の獨創、後者は老藝人の傳統遵守の意味で。

織大夫の太十の後半はさらに進歩の跡がなくて困る、淨瑠璃が難澁至難なもので聴手の注文する様に前進出来難いのは解つてゐるが、古靱大夫病氣代役當時と比して大した變化もないのは、有望な大夫として奮起を願ひたい。「吾聲量」を下の聲で云ふ古靱バリや「勇氣の顔色」や「大音上」の古靱式は聲柄、聲量の違ふ人だけに一工夫ありたいものだ。織大夫程の大夫だから訛のあらう筈はないが光シテ、シ人、などとヒの音が馬鹿に耳立つが、如何。

人形は文五郎の操が結構だが、「誠現はせり」の寫實的な遣ひ方は此の人なればこそ結構なので、客には受けてゐるが若手の人形遣には眞似をさせたくない型である。

玉助の光秀は前年より進境が見える、「無念なれども」の件の横向き形「輪廻のきすな」の荒物らしい遣ひ方は結構である。榮三郎の初菊は相變らず床が相手の人形を語つてゐる間に靜の形が持つてゐられずコセつて困る、「婆が心のせつなさ」の邊の動きなどが其の一例である。こう云ふ件の動きを喝采する最員の引ききたをしは人形芝居に死刑の宣告を與へる様なものである。

る。各人非常に異つた感じのする語り物である、現今は法善寺の津太夫が語つた。文樂系の演出よりも彦六系の團半が組或は伊達太夫、土佐太夫の賣出し時代に種々に手など工夫し監督した演出の方が傳つて居るのである。

主人公の貢が遊里に足を入れても、物堅い男故に偶發する悲劇だけに古靱大夫の口には合つてゐるが、お米、梅川の如き遊女のやるせなさを美事に語り生かす此の人として、おこんの縁切りは其れ程にこたへなかつた。總じて上品典雅な語り口で、萬野や岩次、喜多六の如き厭味な人物は一つ身に附いた面白味が出てゐない。喜助の言葉は非常に結構で此の人らしい旨さが溢れて居た。

餘談に渡るが故鍛太夫は非常に舞臺度胸のあつた人で、本さへあれば何でも一通りは素讀みに語れた、或る時素淨瑠璃で油やの萬野の出て行く件で停電になつたが、平氣で「暗い事ぢや」とか「下駄が解らぬ」とか萬野の入れ言葉で二三分もつないで置いて電氣のつくのを待つて平然と次を語り出したそうである。一見何でもない事の様であるが、力量で語つた昔の大夫の逸話として鍛太夫追憶の意味で書いておく。

人形は甚だ平凡で、光造におこんの大役が附いたが「おかねばならぬ」の言葉で兩手の指を膝の上で動かすのが非常に眼ざわりだつたのと、政龜の岩次が上手へ入る件に一寸鬚をなほして入ると、「性根が腐りました」のおこんの言葉の

古靱大夫の合邦は度々のものだが、相變らず結構で、これこそ眞の大關角力である。

前年の演出と特に異つて耳に残る箇所は「隔れど」と「遺し泣き」がうんと絃から離れて、清六も亦察晴らしい喋き方であつた事。一番いゝ個所は「愛着心は切れもやせん」の俊徳丸の言葉がいかにも癩病になやむ人に聴へる點、共に敬服である。入平の「御主人同然の玉手様」を抜くのも成程とうなずかれる。

攝州合邦ヶ辻の院本に寄ると、手負ひになつてからの玉手御前は、命を捨てた御褒美に次郎丸の命乞ひを高安へ頼む。俊徳丸は亦、母上を殺してまで生きたくないと言ふ、玉手は亦玉手で、私は腰元である、主の爲命を捨てるは武士の家では身の譽れであると、あくまでも吾身を卑下して、いかにもいじらしく書いてある、母親は「小さい時からの氣立ではそのうて何としよう」と嘆くばかりで果てしがつかない、遂に玉手は「もう人頼みには及ばぬ」となるのである。時間にしても一二分で済む件である、今度合邦の出る節はどうか院本通りに語つてもらひたいものである。

近時某氏の如き變態的な院本研究家が出現して、玉手御前は邪憐の戀を精算して死ぬのであるなどの暴論さへ耳にするのである、院本通り演つても時間にすれば僅か一二分でもかたは附くのである、どうか古靱大夫の様な院本研究家に原作の

まゝ語つてもらひたいと思ふ。

其の時になつて古靱太夫は餘計な入れ言をしたなどと云ふ人の出ない様に蛇足ながら貴重な紙面を穢した次第である。

此の一幕の人形は此度はなか／＼いゝ、文五郎の玉手御前は昨年比べるとシットリ遣つてゐて結構だ、一幕中の佳作は「箸持つて」の間の持味である、只「親のお慈悲」で合邦の側によつて頼むのは「拜み廻れば母親も」とある以上、無くもがなだと思ふ。榮三の合邦も上々で、「籤聲で」煙草を呑んでる間の持味「振り返り見る女房の方」の動き方「左に盃」あたりで外の閻魔に御燈を上げてから舟底(平舞臺)から玉手に縋る幕切れまで樂々としたものである。政龜の婆は依然傑作で「何とぞ云うてか」で後向きのまゝ合邦に云ふ件、「眞身の誠ぞ哀れなり」で右手を顎の邊へ當てた形、行き届いた演技である。其他「いま／＼しい百萬邊」で破つた玉手の戒名を「回向の爲の百萬遍」で再び玉手に示したり、「娘を往生なし給へ」で入平が玉手を介抱する間、呼吸を抜かずに眞妙に合掌して居るなど丁寧親切な演技である。玉徳の入平も「憎い苦ぢや」の所で一寸泣く以外は無事を演技で、紋司の俊徳丸、紋太郎の櫻香姫も適當な演出で一幕輝然とした人形芝居であつた。

次の熊谷陣屋は前半の相生太夫は甚だ事務的な語り方で、ひどく眉をひそめる所もない、變りに亦感心する所もなく、

チン型である。熊谷陣屋の人形は「お騒ぎ有るな」で熊谷が相模を足下に踏まへた人形獨特の型は「言上す」の左手に首右手に制札を持つた型と共に人形劇の精華である。此の形を見るにつけ、相模が藤の方をおさへる型を考案した故多爲藏に私は何時も敬服してゐる次第である。

小兵吉の藤の方は下品で藝も非常に衰へが見へる、此の役こそ若手を抜擢すべきであらう。榮三郎の義經は形がくすれて居て南北座ものである。

切の野崎村は呂太夫以下のカケ合、人形も政龜の久作だが紋十郎のお光は袖屏風でお染をさへぎる悪型、榮三郎の久松は平作の肩をもむ前に指をならして、柔道でも始めそうな様子、中途で退却したが、其の方が無事であらう。

總じて此の度の文樂は三絃過剰の所へ、觀西翁の加入で綱造や仙糸は役が無くなり、見物は損をした形である。

#### 第四回

情報局國民演劇参加作品として千本櫻を三段目、四段目と通して出した。然し此度の綱造の彈く伏見稻荷は二段目の口で、次の嵯峨庵室は序の中にあつてゐる。即ち前後して出て居る譯である。然し此場へは原作にない主馬判官盛久が出て來て切腹したり蓮生坊が出て來たりする。多分、植村家三代の主、大助は自分でも改作や加筆をしたし、春の家某とか

義大夫節も此の様に語れば全く退屈なものである。絃の吉五郎はそれと反對に物足りぬ所もあるが「相模はもじ／＼」の邊など味を彈いて居た。大隅大夫の後半は獅子ヶ城の佳作とは別人かとも思へる不出來で「頼まれてしんぜませう」邊の世話のよき味でもなかつたら、古靱なき後の槽下に似合はしからざる不出來である。御當人は大天狗故、樂屋中誰も云ふ人も無い故結論的に申上るが、一貫した一の谷三段目の後半を語つて居る感じの稀薄な事である。此れでは如何に部分的な旨さがあつても一流の大家とは云ひ難いと思ふ。宗清のタテ言葉などは甚だ空氣抜きで「日影に解ける」がおそろしく小言なのは、御當人は絃に離れて語るのが素人には解るもんかと云ふのだらうが、聽いて居る方には甚だこたへがない。「義經どの」の次の大乗りの三味線の間で湯を呑むなどは素人くさいと思ふが如何。筆者は友人に笑はれる位の大隅大夫最負である故、あへて苦言を呈する次第である。晚餐を共にして御世辭を云ふばかりが最負と思つて居たら大隅違ひである。紋十郎の相模は上出來で、始めの熊谷の言葉の間平服したぎりの形も整然として居るし「刀おつ取り」で藤の方に刀を指し附けられた件も巧い。總じて、此度は紋十郎は大當りである。此の人など人氣ではもう誰も並ぶ者はない、もう實力の充實だけを心懸けて精進すべきであらう。

玉助の熊谷は、物語りの終りの「お首を」が後むきなのは

云ふ作者など抱へてあつたそうだから、おそらくは誰かど加筆したものであらう。

幸な事に今度は四段目以外は全部出遣ひでなく黒衣で遣つて居る、非常に結構な事で、情報局参加作品ならば黒衣と云ふ事になれば、平常の出遣ひが悪い事は松竹も認めた譯で愉快である、文五郎や榮三が出るのと出ただけで拍手する不愉快は自然此の度は無かつた。

椎の木の大隅太夫は、別人の如くに牙へ返つて上出來である。本格的に端場の修業をつんだ跡が底光りがして居た。「日の暮からぬむるなよ」など天晴れ、これでこそ吾が大隅である。彦山の杉坂墓所、菅原三段目の東天紅、加賀見山の廊下と一二年續いて美事な端場を語つて居る。端場の語り方さへ知らぬ若手に比較するまでもなく流石は一流の太夫である。

權太は此の場だけが光造だが良く遣つて居た。權太の型を少し丁寧で書くと、合羽の上に座る事、「出しやあがれ」で柳合利で小金吾を打つ事、「此の赤鬚で」で小金吾に足をかけて居る事、内侍若君の引込む間合羽を頭からスツポリとかむつてしまふ事、小せんのクドキの間は平氣で相手にならず善太とサイコロを弄んでる等が歌舞伎と異なる人形劇の独自の演出法である。

小金吾打死は呂太夫仙糸で平凡である、紋十郎の小金吾は少し若々しく遣つて欲しいと思ふ。彌左衛門が羽織を小金

吾の死骸にかぶせて寫實的に刀で押切りにするのは面白い演  
出である。

歌舞伎では先年故松助が小金吾の首を打たうとして、松の  
零が襟元にかゝつてぞうとする件の巧かつた事を餘談に渡る  
が記しておく。

古藪大夫のすしやは非常な元氣で、前年よりぐつと結構だ  
が、此の大夫の聲柄とそくはない語り物である。同じ千本櫻  
でも四段目の河連法眼館か、二段目の渡海屋を語つてもらひ  
たいと思つた。清六の絃は結構で「御運の程ぞ」の邊など此  
の人の美事な敲きで強腕を發揮した。

人形は榮三の權太、政龜の彌左衛門共に結構で、相當面白  
い。權太が後向きに手拭で背中をふきながらの泣きは、涙を  
ふいた様にも見れば、單に汗を拭つた様にも見へて至藝で  
ある。其他「眼をしばたき」で手拭を顔にあてる事、「どう  
で死なねばなりませんまい」で出歯庖丁を使ふ事、「アイ〜」  
であをむけになつて母親と手拭を持ち合ふ事等が人形獨特の  
演技である。

政龜の彌左衛門は非常な傑作で一體此人は動かな過るし、  
動きも無器用で堅いのが缺點だが、此の彌左衛門は此の人と  
して近頃での派手な動作であつた。特に「心は早鐘」で梶原  
の言葉に膽を消した件が巧い、「御膝に落る涙ぞ」で前へ思  
はず進み寄る伴も結構だし、「何故鎌倉へ渡したぞ」の勢組

みも立派な氣組だつた。「思ひ知つたる身の懺悔」の泣く間  
の持味も結構である。

龜松の彌助はまだポケヤツシ(一枚目)が遣へず「よい退き  
機會と」で位置を變へないのおかしいし、一體此處の人形  
は内侍、六代が上手で権盛が末座に居るなど亂暴である。

道行初音旅は伊達、松以下、絃は喜左衛門で、榮三、文五  
郎の忠信、靜の出遣ひだが、左遣ひの加減か足遣ひの爲か知  
らぬが、二人とも前年より衰へて居る。此の程度だと偶然競  
演になつた明治座の織大夫、南部大夫、道八の床に、猿之助  
の忠信の方へ團扇をあげる。

河連館にしても菊五郎の場合なら同心事が云へると思ふ。

探偵三審社

理事長 笠原善三

(東都五十義會常任書記  
事務所 東京都澁谷區並木町四  
電話青山二〇五六番  
自宅 東京都中野區上町二八



端場の研究

川口 子太郎

文 川口 子太郎  
題字 星野 桔梗  
畫 齋藤 清二郎

一口に端場と云つても、立端場もあれば小アゲもある、  
みす内で語る慣例の端場もあるし、切の後についてゐる落合  
と稱するものもある。それらが切の語り場に對して口中次と  
分れる時もあるれば、大夫の顔づけに依ては口を省いて、いき  
なり中次切と並ぶ事もあるし、茶釜酒、噴嘩、訴訟、櫻丸切  
腹(菅原三段目の例)と一々段の名をつけた番付もある。其  
時の事情に依て種々に制約され變化する以上、凡ゆる種類の  
端場を系統的に分類し組織化して學問的に研究資料とする事

は容易な仕事では無い。然し苟も研究と稱するからは或程度  
造體系づけ定義をあたへて行くべきであつて、いつも雜文的  
時評を書いてゐる若輩の私にとつては重荷すぎる。うっかり  
引受けた自分の馬鹿さ加減が、これを書きはじめて初めて身  
に泌みた次第である。

然し四段目には四段目の風があり、三段目は二段目の語り  
口では語れぬ如く、端場には端場の語り方があり、其垣は絶  
對に越える事は許されない以上、端場の獨特の性質意義演出  
法は嚴として存在するのであつて、例へば端場の三味線は切  
よりも必ず調子が高く、従つて大夫も聲をグツと上から出し



ちよんかれの段

してみれば、一つの組織化された端場の體系が整備するかとも思ふのである。もとより一朝一夕の事では無い、今後何年かかけて毎回少しづつ、端場の實例をとり上げて検討してみ、即ち逆に本誌上を借りて私が研究をさせて貰ふ、と云ふ方針をとることを許して頂きたいのである。

二

石割松太郎氏は「人形芝居雑話」に於て、「端場とは一段の纏まつた段物の初めの序開きをいふのです、例へば古靱太夫が語つてゐる天網島の紙屋内の前に靜太夫が語つてゐるところが端場です」と説明され、今の大隅太夫がチョンガレ坊主の件を語つてゐる番付を例證されて居る、端場の意味は凡そ義太夫愛好の士は臚氣乍ら分つて居られるであらうが、叔、立端場や小アゲとのちがひとなると少し曖昧になつて來ると思ふ。そこで私は定義と云ふやうな理論的なことは後まはしにして、具體的な例をとりつゝ考へて見やう。

大體段物の切の場面と同じ場面で、時間的空間的に接屬して居り、切のはじまる迄の説明、筋の進行の準備、切の事件を起すための伏線が幾つか敷設される語り場が端場だと云へる。例へば合邦の口は切と同じ庵室で「心安居の岸はづれ合邦夫婦が志」と殺された娘玉手の通夜に講中の人々が百萬遍

切にあるフシと同じフシは絶対に用ひることが許されぬと云ふやうな約束があり、この切と抵觸しない範圍に於ける曲節によつて端場の味が醸し出されるのであるから、種々なる端場に渡つて個々に具體的に其特色を検討した後に歸納的集成

てゐる。實に端場の妙趣は人生の隅々にこぼれてゐる情抒味の作爲的でない表現にあるとすら云へる。

三

端場から切に移る手段がオクリであつて、大概の場合文章のまん中で切れて次へ残す演出法は何時頃から習慣になつたのか知らぬが、如何にも餘情を後へオクル、前から長い尾を

の回向をしてゐる場面である。同行共が歸つた後「灯はかき立つれど晴れやらぬ子故の闇」に悄然と取残された老夫婦は又しても思ひ出すのは娘の事である。合邦がソツと抹香を盛れば、女房は暗い軒先の燈籠に灯を入れる、「くゆらす香の蕪煙、思ひは富士の高嶺とも、袖は清見が關とめて、涙押へる鉦の音、いとしん」でオクリになり、端場の太夫は本を伏せてお辭儀をするとグルリと廻つて切の太夫が出て、「只今の切」と云ふ口上がすむと、オクリの彈出しで「しんたる夜の道」と靜かに語り出すのである。「いとしんしんたる」といふ文章がまん中で切れて端場と切と、語る太夫が變つても文章は續いてゐる「承前」といふ字を具體化した如き此演出法は、義太夫の特色であつて面白いと思ふ。が、それは兎に角、以上の如き合邦の口は純然たる端場であつて、其處には何も事件は無い。のみならず後の事件の伏線となるべきものさへ無い、極めて簡單明瞭なる事實のありのままの描寫である。然し見逃してならないのは此場面の暗い抹香の煙の低迷せる庵室の中に淋しく鉦を叩く老夫婦の寂然たる姿である。其處には世捨人合邦夫婦のありがたい親ごころと極めて日本人的な日常の生活感情がある。近頃むやみに振りまはされる義太夫の日本精神は、あながち忠義の切腹、身がはりの場面にもみ存するのではない。かゝる何でもないやうな端場の中にも極めて自然な身についた日本人的感情のよき道徳が流れ



ちよんかれの段



するのであるが、次回の初まりには必ず前回の終りの画面が一クサリ映寫される例であつた。文樂の人形淨瑠璃に於ける口から切へ移行する替り目のオクリの手段が洋の東西を異にし乍ら偶然に近似した演出法であることを思ひ合せて私は可笑しく追想することがある。

四

這般の純然たる「端場」に對して稍重いのを「立端場」と稱する。粗雑な定義ではあるが、大體に於て切の場面と時間的空間的に異なつてゐるか隔たつて居て獨立した形を爲してゐるが、然も序切でも二、三、四段目でも無い語り場を指すのが原則であると云つてよいと思ふ。

例へば「千本櫻」の椎ノ木から小金吾討死、「菅原」の東天紅、車引、天拜山、「先代萩」の竹の間、「朝顔」の濱松小屋や笑ひ藥、「日向島」の花菱屋などが立端場に屬する。但例外として場所的時間的に同く接屬してゐる「太十」の夕顔棚、「一谷」の陣屋に對する熊谷櫻、の如きもあるが、要するに端場としては切に近い程重要な語り場であつて、二段目語りと同等の資格がなければ語ることが許されて居ないのが立端場である。

次に端場に似てゐて、切の後についてゐるものに「落合」がある。鏡山の奥庭、布四の紅葉山などがこれで、逆櫓のヤツシツシの後で桶口の物見の松の件がすんで、重忠が出て來る所も落合になつてゐるさうであるが、餘程前に演舞場で津太夫が語つた時丁寧にくゝを演つて、權四郎が「汐の満干でこの子が出來た」の舟唄を歌ふのが耳に残つてゐる記憶があるので、必しも太夫が替るとは限らぬのであらう。

引いて續いてゐる感じで巧妙なやり方だと思はれる。餘談であるが、今三十歳以上の方は記憶されて居るであらうが、私の少年の頃外國の活動寫眞で連續活劇といふものが流行つた事がある。「虎の足跡」「灰色の女」「人間タンク」などといふ題で、寶物のかくし場所を示した紙片をめぐつて美男美女悪漢探偵らが追ひつ追はれつする筋で、危機一髪といふ映寫面になると「今週上場のお別れ」と云ふことで次週へ連續

今二三のオクリの例を拾つてみると、まづ「酒屋」の端場も合邦程度の軽いものではあるが、茲には三勝が捨子をして行くのと、半兵衛が町の五人組衆に伴はれて奉行所から歸つてくるといふ後の事件の伏線が二つほど用意されてゐるので幾分複雑である。年寄五人組を半兵衛夫婦が戸口まで送り出し、「何やら物を云ひたげに、ふりむく宿老を目で止め、稚子抱きおちうばは一間へ」でオクリになり、切の太夫は「こそは入相の、鐘に散り行く花よりも」と宗岸お園の出を語つて行くことになる。

紙治の炬燵の切は「すぐに佛なり」と語り出される。何のことか一寸わからないが、これは端場のチョンガレの終りが「これも十夜の如來のおかけ、是からなりとお禮の念佛、南無阿彌陀佛も口ごもる、心ぞ」でオクリになるからである。同様に廿四孝の十種香の「行く水の」は、端場の景勝上使に於て花造り關兵衛實は齋藤道三が長尾謙信に鐵砲を手渡しせられ、「振りかたげたる鐵砲も、胸に一物有明の、月洩る臥戸へ」で切れるからである。

斯の如く文章が半分でオクリになる事は端場から切への時間的空間的移行が途切れぬ用意であつて、たとへ切場だけを語る素淨瑠璃であらう共、切を語る腹がまへは端場を理解することに依て備へられ、切の雰囲気は端場の空氣によつて用意されることを忘れてはならないのである。



(屋小松演)

更に小アゲと稱する端場の口に當る語り場がある。朝顔の笑ひ藥の端場の前にある島田驛の紋景などが小アゲに當るので、沼津の東路の件を小アゲと云ふのは、小アゲの特殊な場合であるが、普通に小アゲといふのは平作が荷をかつぐ件の名稱なのだと誤解してゐる人も尠くないやうである。いつか素義の會のピラに「伊賀越道中双六」小アゲの段と書いたのがあつた程だ。

同じ端場の中でも、古來の慣例として「みす内」で語るべきものがある。忠臣藏で例を拾ふと三の進物、四の城渡し、五の濡合羽、九の雪こかし等がそれであり、寺子屋の寺入、吃又の虎の段のみす内で語るのが原則だと云ふ。

斯様に端場と云つても實に種々様々で、具體的に例を拾つて研究對象にするより他に綜括的批判は出来にくい。けれ共端場と切との二つの語り場は、二つのものが並んでゐるのみではなく、二つが一つに密着して一段が出来上ると云ふ定理は動かすべからざる事である。恰もそれは梅に鶯のとり合せであり、竹に虎、柳に雨の關係であつて、單に物語の筋が通るといふ以上に大切な事は、口の空氣が切の雰圍氣を構成し口の諸條件が切の活動を制約する事である。繪畫や詩歌に於て柳を理解し愛さなければ雨といふ對象の表現が出て來ないのと同様に、端場を理解し愛する事に依て、切をより深く理解する事が出来、それを第三者に通達するところに初めて表現と云ふ事が完遂せられるのであつて、これはひとり義太夫のみならず凡ゆる藝術に於て不變の眞理であると思ふ。

次回以後に於ていつか「一谷」の陣屋と端場の熊谷櫻に關說するつもりであるが、熊谷櫻に於て相模、藤の方、彌陀六梶原の四人物が熊谷の陣屋へ入り込んで來て、この四人が各自異なる立場から耳をそば立て、聞いてゐる事を前提として、切における熊谷の組討の物語が行はる——端場に於ける之等の條件の制約の下に切の熊谷物語が行はれるといふ事を理解して居なくては、これを演ずる腹がまへが出て來ないわけであつて、即、端場の重要性を示す具體的な例の一つである。

斯様に甚だ斷片的ではあるが、種々な演趣中の個々の端場を粗上にのせて検討するのが結局近道であると思ふので、次に最も普遍的な「假名手本忠臣藏」の主なる端場を對象として觀察しやう。

### 五

「忠臣藏」の三段目は普通四つの語り場に分けられる。即登城進物、おかる文使ひ、殿中双場、裏門であつて、口の進物はみす内で詰られ、文使ひが中と稱される端場、殿中が切で、裏門は落合である。

口の登城進物は、饗應の式日朝早く、まだ夜が明けぬ手先に、高提灯がきらめき渡り諸大名が登城して來る混雜のさ中で、加古川本藏が師直にわいろの贈り物をする場面であつて、式日の未明の物騒がしく、落着かぬ空氣が漂つてゐる端場である。芝居では此場の師直は乗物の中に居て顔を出さず、一切を件内が切盛りするが、淨瑠璃では師直自身が本藏に禮を述べたりお世辭を云つたりするのが變つてゐる。(芝居では必ず此件を上演するが文樂では近頃滅多に出ないので、淨瑠璃から芝居へ輸入されたものであるにも係らず、忠臣藏のやうに完全に歌舞伎に消化されてゐると、逆に人形の方が珍らしい氣がする)尤も芝居では進物の受け答へを師直自身がやつては役がわるくなつて困るのであらう。

扱、まんまと買収された師直は辭退する本藏の袖を控へて殿中のお座敷や座並の拜見をすしめる。勿論本藏はこれからの殿中に於ける主人若狭之助の様子が心配な折柄だから、まさかこれが自分の一生の仕損ひを惹起すキツカケにならうとは神ならぬ身の知る由もなく、丁度幸ひぐらいな氣持で、師直主従に伴はれて殿中へ足をふみ入れる。この爲に、思ひがけずも判官を抱き止める仕末になり、ひいては我愛娘小浪と大星力彌との縁談の破滅になり、遂に九段目の山科に於て、わが命を捨て、大星に謝罪し、娘が難儀と白髪之首を婿力彌に進上する所謂「忠義ならでは捨てぬ命、子故に捨つる親ごころ」の悲劇の原因となる。この段取りが如何にも自然に順序立つてゐて、フトした事から、取りかへしのつかぬ大事に至る、人の身の計り難たさ、人間の運命の危つかしさを如實に示してゐる。誠に本藏の如き思慮分別もあり浮世の苦勞も知りつくした年輩の武士がフトしたまはり合はせで、この日の時、殿中へ足を踏み入れたばかりに一生の破滅となる運命を想像し乍ら此端場を見ると、本藏の後姿が入つて行く城門の暗い夜空に、何か人世に敵意をもつて彷徨してゐる悪靈の無氣味な笑ひ聲がきこえるやうで、私は、辣然と寒氣を覺える。

「主人の命買ふてとる二一夭作算盤の桁を違へぬ白鼠」といふ有名な文句でオクリになり、次の「文使ひの段」になる

と、まづ鹽谷判官が早野勘平を伴につれて登場する。「朽葉小紋の新袴、さはさははつく御門前」と云ふ人さははめきの描寫で、判官が、遅れしは殘念と云ひつゝ奥へ入るのを區切に、さしも騒然たる諸大名の登城の列は止絶えて、門外は急にしいんと静まりかへつてしまふ。「高砂の浦につきにけり」と奥殿で語ふ聲さへ「風がもてる柳かげ」——其處へ文金高島田紫矢がすりの振袖の腰元おかるが文箱を持つて使ひに來る、即、文使ひの段の所以である。

「その柳より風俗はまけぬ所體の十八九、松のみどりのほそ肩も、かたい屋敷に物なれし、きどく帽子の後帯」となかなか魅力的な女らしい。「供の奴が提灯は鹽谷が家の紋所」といふ描寫も、仄暗い堀端の柳かげに、たつた一つ、丸に鷹の羽の紋のついた提灯が、とんぼと眠さうに灯つてゐる感じである。(此の稿つゞく)

## 近 什 山 田 壽 顯

遊湯ヶ原齋藤氏別莊偶成

峯巒含雨影模糊 雲繞樓台擁別途  
遠隔都塵仙境夢 又看窓外米家圖



# 文樂の若手

土門 拳

## — 若い良さを —

文樂の床は歌舞伎のやうな伴奏的存在ではない。藝力において淨瑠璃が人形より二三割方上であつて丁度充實した芝居が見られる關係にあらうか。舞臺の人形遣ひが床を流し目に「何たる淨瑠璃や」と馬鹿にするやうになつては文樂もお終ひである。逆に古靱のやうな肚にグイグイ徹へる聲調に會つては、どんな人形遣ひでもチャランポラには遣へないであらう。古靱一人の存在が今日の文樂の藝を支へてゐることの如何に大きいかを舞臺附近に見てゐるとシミジミ感ずる。

その意味で明日の文樂を支へる責任にあるものは淨瑠璃陣の若手である。それが話に聞くやうな激しい修業振りをどうも見受けられないのはどうしたわけであらうか。古靱が床を勤めてゐる時、床裏で丸本を手に懸命にノオトしてゐるのは

破れを恐れず、大きく伸び伸びとからだ丸ごとの義太夫を心掛けて頂きたい。現在の文樂に一番缺けてゐるものは夫と思ふ。

## — 動く人形 —

三人遣ひの人形陣は淨瑠璃陣に較べると人数も少ないのに仕事は多くて非常に忙しい。自分の出遣ひの袴を脱ぐ間も遅しと黒衣に替つて他人の左や足遣ひに出なければならず、鬘や衣裳の手入れ、次の興行の人形の拵へ、役済みの人形をつぶして荷造りと雑用の連続だ。三十人の人形遣ひ中他人の左や足のスケに出ないで済むのは榮三、文五郎、紋十郎の三人だけである。然し若手は忙しいからと云つて一番大切な演技の研究を疎かにしてよいといふわけには行かぬ。その雑用の中から今日の榮三が出、文五郎が出てゐるのである。

總じて若手の人形は動きすぎるやうに思はれる。あんなに動かさなければ芝居にならぬのかしらと疑問になる。極りが極らずのべたらである。動く割に役の心理表現はこつちの肚に徹へない。大體動きが動きとして生きるのはその前後に「靜」があつてのことではなからうか。十の動きはその七八に止め、その餘は客の肚で受けとめさせるわけに行かぬものであらうか。

氣品ある餘韻といはうか。その意味で、榮三の心理表現を

誰であらうか。清六の氣魄鋭い撥捌きを盗まうとして横幕の陰にジツと床を覗んでゐるのは誰であらうか。

一體義太夫のやうな至難な藝道において修業未熟の下手さを責めたところで一朝一夕にどうなるものではあるまい。恐しいのは下手なことではなくて、若いにも拘らず自己の藝道に對する一向専念からだ丸ごと打つかつて行く熱と意欲に缺けてゐることである。床を濟すと汗をおとす間も遅しと羽織袴で支關口に現はれる閑に、今しも勤めた床の反省でもしたらどうか。若い者の不勉強を憂へつゝも「私程度の方が上に立つてゐる現状ですから」と辯護する古靱の謙虚な心情には思はずホロリとさせられる。

どうか日本の偉大な傳統藝術を明日に受継ぐ責任を自覺して藝道三昧に生きて貰ひたい。若手は何もうまい義太夫を語る必要はない。大向ふの受けなどを氣にするのは卑しいことだ。只若い者だけが持つ氣魄の烈しさを以て、聲を惜しまず

極めて必要な動きだけに止めて苟も無駄な動き見せない肚の深さと、義太夫のマに正しく乗つた出入りの誠實さは模範となるべき多くを含んでゐる。

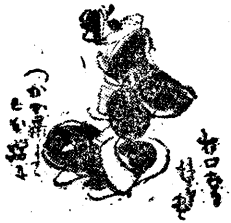
また文五郎の靜から動へ移る時のあの神氣發動する呼吸を我がものに學び取つて貰ひたいものだ。今のうちである。

何しろ人形陣も今は玉造一人の病氣不參ですら配役の上に無理を感じさせる弱體である。若手は一切の地獄極樂を藝の中に求むる捨て身の修業心を燃して貰ひたい。そして大ぶりの伸び伸びとした藝をこそ心掛けて欲しいものだ。今後新作物の上演につれて、あの新派的な演出がいつの間にか文樂の古格ある藝を崩しはしまひかといふ心配もある。

## 若手素義を奨励する會

青年素義の將來を期待し、勉強精進をさせませう。といふ頼もしい趣旨で川口子太郎氏方に事務所を置き「若手素義を奨励する會」が組織され、星野桔梗氏補導出演の下に七月廿五日正午より並木俱樂部に於て第一回を開催した。全部一段語りで、次回は九月中旬の豫定。

陣屋(ぼくろ、團市)封印切(子太郎、綱助)鮎屋(義貞、猿三郎)杏掛(桔梗、綱助)



# 忠臣蔵スパイ合戦(一)

伊藤 紅 二

スパイはどうせあの觸手を動かし、手足を働かして所謂、網の目の様々と云ふ蜘蛛の巣から出た言葉だらうと思ふが、其の蜘蛛に名を得て全身これ何物かをさぐらすんばと云ふ態勢はまさに文字通りスパイ戦にはふさはしい表現だと思ふ。

凡そ、このスパイの觸手に對して防諜と云ふ術語は似ても似つかぬ漢語でもあるが、然し、スパイ即ち間諜、其の間諜を防ぐと云ふのだから、まはりくどく考へれば之でも何も縁のないことではないらしい。

其處で其の防諜に積極的な場合と消

とう／＼刀のつかに手をかけて殺そうとまでいきまくのだが、其處へ運よくもとの足輕寺岡平右衛門が出て来て命ごひをする手順、仲々心得たものである。

其の間へ、

「由良さん／＼手のなる方へ……のいどけない遊びの狂態を點綴して舞臺技巧としては、もつともにぎやかなものに仕立てゝあるし、敵をあざむく防諜第一課としては先づ成功の部類となるのである。

もとへもどつて平右衛門がお家の大變からの苦衷を述べるくだりがある。

「主の仇師直めを一討ちと鎌倉へ立越三ヶ月が間、非人となつてつけねらひ……」

とあるから、七段目の傍系にはなるが非人に變装したと云ふことは國際スパイ合戦などにはよくある手であり、之花をあざむく女でもあらうものなら、さしづめマクハリかエ二十七號な

極的な場合とがある様だが、防ぐと云ふのに積極的と云ふのも、をかした物だと云ふ人もあるのは面白い。

然し「敵を欺くには先づ味方より」と云ふ孫吳の兵法もどきで、まこと味方をさへたばかる様な反問苦肉の策を講ずる様なことも間々あるので、之などは見方によつてはまさに防諜の積極的な場合と云ふことも云へる様にも思ふ。

其處で、そんな場合を「忠臣蔵七段目」をかりてそれを一つ／＼の例にしようかともくろんで見た。

竹田出雲書く所の、假名手本忠臣蔵

どと騒がれること必定の所、それにしてもむくつけき、足輕風情ではあり、それが非人になつて敵をつけ狙つたと云ふのはでんでんで色氣がなさ過ぎると云ふもの。

然し、芝居の見榮としてはこの足輕君仲々の味をやるので、大向ふをうならせるし、一方は映畫、こちらは舞臺でと、それ／＼持場々々の職域奉公をしてゐることになる。

しかし、あまりにも、出すぎた忠義立てをして、口をすべらせるので、酔ひしれた由良の助様にさへ、「其の許は足輕で無うて、大きな口輕るぢやの——」などと擲論半分のたしなめを喰ふスパイ封じの件りがある。

總じて、この防諜には口止めが第一

さればこそ防諜ボスターなどには「見ざる、言はざる、聞かざる」をモットーにしてゐるものもあるげなこの邊はさしづめ防諜學の消極的部面かも知れない。

は全篇これ防諜戦あれやこれやでない所はない程に、まことに入り組んだ、そしてよくも企んだと思はれる程に上手にスパイ合戦をとり仕組んであるがしかも、その一番もれ上つてゐるのが例の七段目、稱して「一力茶屋の場」であることに誰も異存はない。

先づ橋が入つて明るいう下座の御囃子で幕あき、花に遊ぼう祇園あたりの色揃へ……と至極あの一幕のプロローグとしては氣の利いたものであるが、凡そスパイ戦には縁遠い場面。

近頃はよく時間の都合で省かれるので好劇の失望する例の三人侍の出になるが、矢間十太郎、千崎彌五郎、竹森喜多八とて、何れも同志中の錚々たる面々。

其處で敵を欺くには先づ味方よりと前に述べた通り、一味の棟領由良の助たるものは、この三人に先づスパイ戦の網を張らねばならぬ。三人をおこらせてしまふ程にうまく欺罔するので、

由良さんは、この時分、すでに、敵の間者や、斧九木夫、鷺坂伴内などがこの一力茶屋に入込んでゐることを知つてゐるので、ひどくのんだくればはゐながら、仲々味のある敵をあざむくたとへごとを連發して、一座を煙に捲いてゐる。

「丹波與作が歌に江戸三界へいかんして……だの、

「私も蚤の頭を斧で割つた程無念な共存じて四五十人一味をこしらへては見たが……だの

「仕負ふたとてあとで死なねばならぬと云ふは人參のんで首くくる様なもの……」

だとか云つた擧句、平右衛門をひやかして

「敵の首を斗升ではかる程とつたとて……だの

「青海苔貰ふた禮に大々神樂をうつ様なもののだのと存分の悪たいを云つて自分には仇うつ所存は御座らぬ所を御披露に及んでゐるが、この邊の味は大出雲にしてはじめて書けた淨瑠璃文句と云ふべきだ。(つどく)」



# 女義短評

▼因會女子部

▼綾之助會

内田三千三

## 因會女子部

素女の「堀川館」と若好の「儀作住家」を一聴したく思ひ乍ら晝の部に間に合はず、夜の部彌周、三生の「鳴門」から聴く。

彌周の淨瑠璃は強靱な描線を持ち乍ら粗密柔歌の妙を、時に缺くキラヒがある爲め健達だが、荒削りで潤ひが足り無い。淨瑠璃は風味なき達者さのみで走つては行き止りだ。絶えざる鍊磨と洗練によつて藝道の深淵に透徹すべきである。

十郎兵衛の「娘はとうから戻つてゐる」……に惻々と迫る絶望的な陰彩が

齋度を深めて帝都淨瑠璃界の名物行事になりつゝある。「名物に旨いものなし」と云ふ諺もあるが、これは相當な味ひを持つてゐる。眞摯な精進と不屈な氣魄の結集によつては、眞に藝術の花を咲かし得る可能性もある。

筆者は初日の花の眞虚善惡を觀聽に濱町へ瘦脚を運んだ。

人呼んで「腹切り彌照」と別名ある彌照の沼津奥千本松原は、平作に味があつて腹へ突き立てゝから濃い悲愁を湛えるのは叩き込んだ腕である。熱っぽい上ツリが無く、じゆつくり胸に迫らせる演出の寸法も達者さの裸に一脈の潤ひがあつて悪くない。

人形は鬢子の平作が眞摯懸命で、當て味にはせず、地味に哀魂を描き出すととする演出對度に好感が持てる。人形演出の至難さは技魂一如の渾然味にある。乙女文樂の若き技藝者は技巧の華美を追はず、人形に魂を送る良き内面性の所有者でありたい。

ありたかつた。

素次、清三の「宿屋」は勘所が悪く鍛練と氣韻の不足をかこちさせた。外型的に素女の長所を模寫しやうとする努力が返つて淨瑠璃を粗惡にさせてゐる。要は師素女の呼吸と間を習熟し、小音非力を克服して良昇して欲しい。

綾千代、猿玉の「寺子屋」……は、なめらかに運ぶが、コクに乏しい、人物の心理轉換と氣魄が淡く、いさゝか唄ふ義大夫の感を深くさせる。手馴れた練熟性が生む平坦な流暢感の基底に心音脈打つ滋味が加はれば風趣が生れやう。

綾之助、清一の「鮎屋」……はネットリ流して語る色彩の濃度さはあるが甘美な巧者さを持つてゐて流石に藝に根底がある。あれで維盛に優美な氣品がおほらかに出れば悪くない鮎屋だ。「繪にあるやうな殿御の御出で」……が佳い味である。

素昇、猿玉の「太十」……は久々で實一駕籠に揺られて……までを語るが、重厚な氣魄が満場を壓した。局部的には剛直な藝感の強度さと女性表現の生硬さが音感的に迫力を削ぐが、松王と源藏が良く、首實験の前後に雄烈な迫眞性があつて好演だつた。

松王は咳入りの前後がコセ付かず、ゆつたり幅を持たせて格調を崩つさず語る。演出の描線が生真面目過ぎる難はあるが、輪廓の雄大さを持ちつゝも表現内容が空疎に成らぬ實力を採る。この人の短所である努めて淨瑠璃を大きく語らうとする熱演過多が漸く其の幣を脱して風格の大きさに自然さが伴つて來たのは一進歩だ。

素昇、猿玉の奥はサラリとやりつゝ急所々々が引締つてゐる、樂々と聴かせて藝に安定感と寛瀾な滋味がある。松王の泣き笑ひが腹藝で迫ると、いろは送りも派手過ぎず地味に偏せず一種の實力美で聴かす。前者猿玉の場

力發揮の逸品で堪能させた。素女の澁い太十を除くと東京在住の女義で太十をほんとうに語れる人は五指を數へるに足りない。しかもその人々は、それ／＼一長一短があつて、完璧と云ひ難い。中に素昇の「太十」……は本格で雄妙な滋味がある。地力と腹で語り棄てる迫力と餘韻が凡でない。光秀の優愴感も豪烈である。十次郎の「思ひ置くこと更になし」……を文字通り格然力強く語るが、氣品高い心韻の香りが欲しい。

會長素女は「競伊達物語」「新薄雪の蔭腹」の如き上演稀な傑作を採り上げて後進への規範に研究演出し、綾之助、素昇、染登、土佐廣、小津賀、重之助、越駒、住若の大幹部は持場の外に山の段や「源太勘當」の如き名作の掛合に精魂を注そがせて見たい。

## 綾之助會

乙女文樂と綾之助の提携は公演毎に合には作品に喰ひ下る苛烈な氣魄が貫流するが、素昇のは作品を自分のものにして語つてゐる餘裕がある。藝の餘裕が遊びにならず着實な迫力となつて濃淡活殺の明暗を生む處に年功の妙がある。

人形では貴美子の松王が話題になる座長格の桐竹梅子を失つて立役陣の脆弱さを杞憂したが、貴美子の松王は梅子に見る強靱な腹と凛烈な鋭さに缺けるがクセの無い巧緻さで流麗に使ふ。源藏を使ふ芳子も堅實で臭くなく、「せまじきものは……を立身の儘で、一寸と味を出す。千代の千惠子は輪廓は大きい未完成で車輪過ぎて縁が硬い、幽寂と悲愁と心韻が欲しい。

久しく休聲してゐた越道、巴住の「紙治」は抒情美のある演出でスツキリ聴かせる。治兵衛の心に内燃する情痴陰影が淡いのと、この作の大切な雰囲気である冬の季節感に乏しいのが瑕瑾だ。

消息

會報

空の旅

河野國聲

今朝東京都を立ち川からスグ追風の吹く岡へ、夜は大わんで一杯やつて翌アサはマニラが本場、物價はボルネオが高さうだナンて考へ乍ら南は招く招南へ招南へ。馬來蛇わ、スマ虎も見た上、バンコックの作るうまい洋食をサイゴンの思ひ出としてホンコン轉換、又上海一とびの空の旅、天津奉天と、テン／＼飛んで再び戻る東京都。

綾秀會より

傍島出雲

貴社益々御隆昌奉賀候陳者當綾秀會儀

益々御發展御芽出度存じます、時局柄紙不足に加へ印刷所工員不足のため經營も一ト苦勞のこと、は拜察いたしました、すが、どうぞ日本精神發揚のため御努力の程を切に御願ひ申上ます。

乙女文樂二日間興行が都合に依り一日間となり大入超満員にて大盛況に御座いました。

冠三追善興行は十六、七日の二日間のところ當地防空演習の爲め月末に延期すべく、明日あたり名古屋へ出張いたす心組に御座います。大隅、伊達、七五三、之に源太夫を加へ紋十郎、文五郎外の豫定になつて居ります、仙三郎並に源太夫は當地に寸名程門人が御座いますので毎年夏休を利用して二十日間位滞り、稽古をいたします、本年も只今道頓堀角座へ特別出演中に付月末來演を待て追善興行へ加入の豫定になつて居ります。

小樽より

去る六月四日總會を開催し山田前會長を顧問に推薦し舉つて會の内容を一新せんが爲め選舉會を施行致したる處、誤りて拙者が會長に當選したり、依て會則を制定し理事三名會計一名を置き陣營を立直したるも、元より會長たる資格なく徒に名目を汚す而已なり、然れども健康最後の娛樂たる人生最も一大本義たるべき義太夫こそ、則ち健康

1、心掛は健康の父、2、健康は活動の母、3、活動は幸福を生む。拙者の精神なり。

右會長就任の御挨拶旁々尙ほ一層御愛顧あらんことを伏て願上候

静岡より

戸塚喜三香

愛義家の皆様暑さ殿しき折柄御元氣ですか。私事三好會にて出演中は貴誌を始め皆々様に久しく御聲援に預り難有御禮申上ます。今度家事の都合にて静岡へ引越しました、静岡にても不相

豊澤廣助

例年の通り避暑旁々七月末より當地へ參つて居ります、本年はこちらも五十六年振りの暑つさとの事にて、内地はさこそとお察し申上ます。本日より四日間催ほしがあります、二十日過ぎ御地へ參る豫定、いづれ拜眉萬々。

(八月七日)

x x

△十喜和會

七月十五日正午より松坂屋ホールにて開催の筈であつた十喜和會は防空演習の爲め、一日繰り上げて十四日淨曲協會樓上にて催ほした。

陣屋(松葉家)新口(義昇)先代(素風)大文字屋(桔梗)十種香(紫蝶)喜内(梅月)山名屋(山生)安達(淡路)絃(廣助)助演(鹿重、仙玉、廣三)

△墨聲會 向島墨聲會は今回世話人制度に改組し、山田義昇、京極辰和加太田共樂の三氏が世話人となり七月廿日小村井宮田亭にて開催。十種香(辰

變義太夫を勉強致したいと思つてゐます、今後とも何卒宜しくお願ひ申上ます。(以下個人廣告につき省略す記者)

三好會

森 三 好

毎年七八兩月は夜間七時半より練習を開始し温習會(俱樂部出演)は休演なれ共、九月二十二日は牛込神樂坂千鳥にて第十七回を催す事に決定したり。

今回は當會專屬戸塚喜三香家事の都合にて静岡へ轉居、久しく貴誌其他御負最の皆様に御聲援を忝うして居たりしが乍残念永の別れとなり、其代り今井燕京さん出演せらるゝ事に成つた。因に左の藝題出演の豫定なり。太十前(津満子)、太十奥(時昇)、忠六(燕京)野崎口(梅聲)、野崎奥(三好)、三味線(津満子、燕京、三好)

濱松より

佐藤和聲

和加(揚屋(久松)合邦(合邦、吳光、玉手、叶昇。母、共樂)寺子屋(叶)壺坂(翠松)堀川(與次郎、桔梗。お俊、義昇。傳兵衛、吳光。母、うつろ。おつる、辰和加)絃新造、松四郎)なほ今後二組に分け隔月に開催する事になり八月は二十七日交正俱樂部に於て開催△淨聲會 七月二十日午後三時より文化俱樂部に開催 新口(義昇、巴住)柳(土佐光、素昇)宿屋(紫蝶、仙玉)幡隨院(梅月、廣三)太十(美福代、吉歌、素昇)なほ同會は毎月二十日に例會を催す。魚崎美福氏再入會、竹内土佐光氏新入會。

△女天會 八月十一日文化俱樂部に開催。八百屋(叶、扇之助)忠六(喜らく、勝助)先代(春榮、絃平)太十(里芳勝助)合邦(叶昇、新造)△素玄淨曲研究會 八月十五日朝日俱樂部にて五八回錬成會を開催。近時隨聽批評(内田富太郎)先代(北斗、猿幸)太十(素昇、猿玉)五十九回は麴町

山の茶屋にて土佐廣の櫻時雨を聴く會として開催し、六十回は神楽坂「千鳥」にて九月二十四日開催。

△婦人素義信州行き 八月末より

九月月上旬にかけ黒川叶、島春榮、増田喜香、岡野芦鶴、麻田喜らくの諸氏は(絃猿喜知、勝助、龜造、扇之助、仙十郎)戸倉、長野、松本地方へ清遊。

△小樽「松葉會」 豊澤廣助師指導

に依る小樽市「松葉會」は今回同師の渡道を機に八月七日より四日間毎夕五時より花園町會事務所に於て番組の通り催はした。(七日)濱松(廣江)太十(十三)本下(二聲)鰻谷(壽)新口(十)十(鮎屋)司(紙治)(三笑)十種香(重菊) (八日)太十(廣遊)酒屋(松廣)陣屋(廣喜)揚屋(政太郎)沼津(越登)儀作(廣陵)合邦(梶晴)忠九(團政) (九日)壺坂(廣壽)寺子屋(松玉)酒屋(喜昇)日吉(廣喜)御殿(廣江)紙治(十三)忠四(廣遊)太十(松廣) (十日)儀作(司)忠六(二聲)堀川(梶晴)十種香(松光)又

助(廣昇)酒屋(廣壽)合邦(松玉)御殿(三朝)絃(廣助、廣一郎、團之助)四日間の大切は野崎、新口、明鳥、太十、(廣助、廣一郎)

△女義若女會 第七十一回を八月一日午後六時より東橋亭にて開催。先代(駒榮)忠六(素次、清三)太十(素廣、巴住)鮎屋(素八、駒登久)壺坂(土佐廣網助)

△吉田冠三追善 八百屋のお七を吉田文五郎に教へたといふ吉田冠三の墓碑が濱松にあり、書は今の竹本大隅太夫が書いたものであるが、今日迄追善の機會なく、今度名古屋打上げ後濱松に於ける二日間の興行を幸ひこれが追善をも行ふ事となつた。

太夫三味線は大隅太夫、伊達太夫、七五三太夫、隅若太夫、津磨太夫、清二郎、喜左衛門、徳若、清廣。

人形は若手の外文五郎が特に出演なほ此類ぶれの外南部太夫、重造を加へ、一月行くべき筈であつたものが延期となつてゐた故竹本士佐太夫墓碑除幕式に土佐へ行く事になつた。

### 太棹社彙報

◎本欄は大會又は新生の會を報道致します。  
◎開催前月に詳報したものは開催後の記事を略します。  
◎持種の催はしの外、前書を略します。  
◎番組御送附なきもの、或は通信なきものは記載されとなりませ、御諒承を乞ふ。(掲載順不同)  
◎なほ見出しに二號活字を使用、特別掲載方御希望の會は其旨御一報を乞ふ。

太棹社

### 大會成績表 開催順 (六月末日迄通信の分)

### 平安素人淨曲會

第五回成績表 (五月十四日より三日間京都八阪俱樂部にて開催)

- タツミ(一八〇、五)鶴笑(一七四、五)鶴峰(一七二、〇)小富士(一六五、〇)花佳(一六三、〇)里昇(一六一、五)あしべ(一六一、五)光友(一六一、五)あるを(一五九、五)五勢(一五九、〇)華遊(一五八、〇)花房(一五七、五)盛鶴(一五五、五)呑笑(一五五、〇)鳳車(一五四、五)九鳳(一五二、〇)小昇(一五二、〇)幸友(一五一、五)杜若(一五〇、五)やぐら(一五〇、〇)長登(一五〇、〇)野風(一四八、〇)巽(一四八、〇)

### 藝能報國

### 竹本小津賀

### 豊澤松榮

- ナゴン(一四五、五)大和(一四五、〇)晴山(一四四、五)金鳳(一四四、〇)西喜(一四二、〇)菊二(一四一、〇)古城(一四一、〇)つばめ(一四〇、五)琴城(一三八、〇)常盤(一三八、〇)紅雀(一三六、五)はじめ(一三六、〇)都廣(一三六、〇)源縁(一三六、〇)美よし(一三五、五)貴美代(一三五、五)旭玉(一三五、〇)都(一三四、〇)壽々女(一三三、〇)まる(一三一、〇)猿昇(一三一、〇)信二(一三〇、五)久惠(一二六、五)大和翁(一二六、〇)以呂波(一二五、〇)喜玉(一二五、〇)さの(一二〇、〇)みその(一二〇、〇)近松(一一九、五)進(一一九、〇)源(一一九、〇)貴志(一一八、〇)鬼外(一一八、〇)春洋(一一七、〇)こま井(一一七、〇)春榮(一一六、五)日石(一一六、〇)梅子(一一五、〇)歌昇(一一四、五)やなぎ(一一四、〇)都號(一一四、〇)廣江(一一三、〇)かぶき(一一三、〇)喜久賣(一一二、五)春晃(一一二、五)ろげ(一一二、五)光子(一一一、五)やなぎ(一一一、五)昇(一一一、〇)伍登(一〇九、〇)京彌(一〇九、〇)春日(一〇九、〇)扇司(一〇八、五)い十(一〇七、〇)小木(一〇七、〇)東(一〇六、五)紅雀(一〇六、〇)すゞめ(一〇三、五)芦雁(九八、五)大理(九三、〇)
- 東大關(タツミ)關脇(鶴峰)小結(花佳)張出(小結)あしべ、西大關(鶴笑)關脇(小富士)小結(里昇)張出(小結)光友、團體賞(初團連)、優秀賞(一、喜玉、二、信二、三、貴志、四、

さの。五、はじめ)新加入(春榮、い十、みその、東、ろげ  
〇)

### 大日本素人淨瑠璃會

第十五回成績表(六月一日より五日間大阪北陽演舞場に於  
て開催)

生樂一九〇、〇(金聲)(一八八、八)孝調(一八八、五)和十  
(一八六、八)重司(一八五、八)タツミ(一七七、三)義鳥(一  
七二、〇)鶴笑(一七〇、四)登一(一六四、五)鶴峰(一六三、  
九)うろこ(一六〇、四)紅司(一五九、三)小富士(一五八、三)  
榮四(一五七、六)三樂(一五五、〇)文字廣(一五四、三)里昇  
(一五三、三)光友(一五二、二)あしべ(一五一、〇)きく水  
(一五一、一)花住(一五一、〇)長登(一五〇、五)得谷(一四  
八、八)蝶(一四八、二)五勢(一四六、七)華遊(一四六、五)  
藤政(一四四、三)幸遊(一四三、六)長生(一四二、八)多久美  
(一四一、四)住之助(一四一、三)大和(一四〇、七)ナゴン(一  
四〇、七)やまと(一四〇、二)旭照(一三九、八)金鳳(一三九  
、七)こたま(一三九、七)小昇(一三九、四)金花(一三九、四)  
大彌(一三九、三)野風(一三八、二)義若(一三八、〇)松呂(一  
三八、〇)達竹(一三七、三)飄月(一三六、九)杜若(一三六、  
三)白水(一三四、八)古城(一三四、七)晴山(一三四、五)透

昇(一三四、四)山玉(一三二、四)駒平(一三二、一)三島(一  
三一、一)若葉(一三〇、六)西喜(一三〇、〇)華峰(一二九、  
六)あさ(一二八、二)はじめ(一二八、〇)やぐら(一二七、  
四)雅樂(一二七、〇)駒入(一二六、八)榮鳳(一二六、〇)い  
わを(一二五、八)梅光(一二五、一)敷島(一二五、〇)暫(一  
二三、九)鐵洲(一二三、六)都廣(一二三、六)信(一二三、  
三)幸長(一二三、三)老若(一二三、〇)花月(一二三、四)左  
文字(一二二、三)二笑(一二二、四)喜鳳(一二二、一)美よし  
(一二二、〇)長壽(一二〇、六)鳴門(一二〇、五)照都(一二  
〇、〇)旭玉(一二〇、〇)芳玉(一一九、七)都華(一一九、七)  
好齋(一一九、七)一昇(一一九、六)榮昇(一一九、四)樂水(一  
一九、三)喜玉(一一八、九)正鳳(一一八、五)つくも(一一八、  
一)藤四(一一七、九)喜昇(一一七、六)都(一一七、四)和調  
(一一七、一)まる(一一七、〇)春洋(一一六、九)香生(一  
一六、五)柳松(一一六、四)さの(一一四、五)春花(一一三、  
六)日石(一一三、一)源(一一二、七)駒登(一一〇、八)白扇  
(一一〇、八)京彌(一一〇、七)進(一一〇、四)喜雀(一一〇、  
八)都號(一〇九、八)鬼外(一〇九、三)こま井(一〇八、五)  
歌昇(一〇七、三)一聲(一〇六、七)雅若(一〇六、一)可祝  
(一〇四、一)船玉(一〇三、六)三善(一〇三、三)榮助(一〇  
三、〇)貫昇(一〇二、七)■(一〇二、五)松壽(一〇二、三)  
時昇(一〇一、七)新かね(一〇一、三)秋月(一〇〇、八)戸浪、

(九九、九)寅嘯(九九、五)紅雀(九七、六)爲照(九五、九)松  
鶴(九五、八)小文正(九一、三)大理(九〇、三)  
東大關(生樂)關脇孝調)小結(重司)、西大關(金聲)關脇(和  
十)小結(タツミ)、大關連續獲得賞(生樂)、優秀賞(一、喜  
玉、二、金花、三、樂水、賞狀、文字廣、ナゴン、つくも)  
團體賞(廣助連)、十回勤続賞(藤政、小富士、晴山、きく水、  
金聲、大彌)新加入奨勵賞(君香連)

### 東都五十義會

第卅八回成績表(六月廿三日より四日間日本橋俱樂部にて  
開催)

花房(一六五、五〇)あるを(一六四、六六)盛鶴(一六三、  
〇〇)文久(一五八、八三)吞笑(一五八、六六)鳴門(一五八、  
五〇)未成(一五八、一六)米司(一五六、六六)靜(一五六、五  
〇)龜鶴(一五三、五〇)源縁(一四九、八三)錦司(一四九、八  
二)淺路(一四九、六六)義昌(一四九、〇〇)東雲(一四八、一  
六)東好(一四七、八三)力(一四七、五〇)都(一四七、三三)  
喜鳳(一四七、一六)扇柳(一四五、三三)松鶴(一四四、一六)  
一義(一四二、八三)梅聲(一四二、六六)吳羽(一四二、三三)  
錦(一四二、〇〇)彌聲(一四一、八三)かなめ(一四一、三三)  
豊(一四一、〇〇)一昇(一四〇、八三)喜玉(一四〇、六六)正

鳳(一四〇、五〇)吳光(一四〇、一六)清光(一三九、八三)紅  
陽(一三九、三三)錦松(一三八、五〇)飄六(一三七、八三)美  
翠(一三七、一六)清雀(一三六、八三)文樂(一三六、八一)蟻  
若(一三六、五〇)榮玉(一三六、一六)竹糸(一三五、一六)壽  
光(一三五、〇〇)以呂波(一三五、〇〇)峰樂(一三五、〇〇)  
駒司(一三四、六六)一(一三四、五〇)若松(一三四、五〇)吾  
樂(一三四、三三)二葉(一三四、三三)要(一三四、一六)喜光  
(一三三、〇〇)豊國(一三三、六六)美幸(一三三、三三)龍光  
(一三一、八三)喜昇(一三一、三三)重尾(一三一、〇〇)共樂  
(一三〇、六六)清昇(一三〇、五〇)柳汀(一三〇、三三)喜鶴  
(一三〇、三三)松巴(一三〇、〇〇)集樂(一二九、六六)しげ  
る(一二八、〇〇)美竹(一二七、八三)北壽(一二七、五〇)花  
昇(一二七、〇〇)都洲(一二六、六六)光華(一二六、六六)昇  
(一二六、六六)水晶(一二六、六六)好玉(一二六、五〇)喜照  
(一二四、五〇)都玉(一二四、一六)三車(一二三、八三)良祐  
(一二三、〇〇)都仙(一二一、八三)廣遊(一一九、〇〇)東玉  
(一一八、五〇)秀玉(一一六、五〇)

東大關(花房)關脇(盛鶴)小結(吞笑)、西大關(あるを)關脇  
(文久)小結(鳴門)進歩賞(一、美幸。二、東雲。三、文久。  
四、峰樂。五、喜光)勤続賞(市菊)奨勵賞(絃平、猿之助、  
都大夫、團市、若好、重之助、松四郎、道之助、巴住、新造  
素女若、扇之助、綾之助、鶴玉、路大夫、寛治郎(以上順不同)



柳有明氏	永路氏	淡路氏	淺玉氏	幸玉氏	榮生氏	司氏	壽氏	清氏	鳳氏	松氏	聲氏	昇氏	外氏	月氏	梗氏	樂氏	城氏	香氏	扇氏	角氏	勇氏
明氏	永氏	淡氏	淺氏	幸氏	榮氏	司氏	壽氏	清氏	鳳氏	松氏	聲氏	昇氏	外氏	月氏	梗氏	樂氏	城氏	香氏	扇氏	角氏	勇氏
吉川喜喜氏	義義義氏	義義義氏	義義義氏	義義義氏	義義義氏	義義義氏	義義義氏	義義義氏	義義義氏	義義義氏	義義義氏	義義義氏	義義義氏	義義義氏	義義義氏	義義義氏	義義義氏	義義義氏	義義義氏	義義義氏	義義義氏
西村喜喜氏	岩木義義氏	吉並義義氏	三並義義氏	吉並義義氏	後藤義義氏	保村義義氏	西村義義氏	高岩義義氏	吉並義義氏	橫田義義氏	北野義義氏	吉並義義氏	須美義義氏	須美義義氏	須美義義氏	須美義義氏	須美義義氏	須美義義氏	須美義義氏	須美義義氏	須美義義氏
吉川喜喜氏	義義義氏	義義義氏	義義義氏	義義義氏	義義義氏	義義義氏	義義義氏	義義義氏	義義義氏	義義義氏	義義義氏	義義義氏	義義義氏	義義義氏	義義義氏	義義義氏	義義義氏	義義義氏	義義義氏	義義義氏	義義義氏
打新晉氏	西島昭氏	高平昭氏	高平昭氏	高平昭氏	福平昭氏	桑原昭氏	池田昭氏	魚尾昭氏	松崎昭氏	白井昭氏	近藤昭氏	佐藤昭氏	井上昭氏	富田昭氏	沼田昭氏	時田昭氏	江崎昭氏	三昭氏	三昭氏	三昭氏	三昭氏
水氏	華氏	平氏	靜氏	重氏	茶氏	登氏	尚氏	福氏	雄氏	華氏	華氏	鳳氏	路氏	昇氏	鶴氏	史氏	昇氏	芳氏	豆氏	義氏	寶氏
神戶氏	大垣氏	船橋氏	同氏	同氏	同氏	同氏	同氏	同氏	同氏	同氏	同氏	同氏	同氏	同氏	同氏	同氏	同氏	同氏	同氏	同氏	同氏
岡田氏	川奈氏	吉東氏	安東氏	保東氏	鈴木氏	鈴木氏	鈴木氏	鈴木氏	鈴木氏	鈴木氏	鈴木氏	鈴木氏	鈴木氏	鈴木氏	鈴木氏	鈴木氏	鈴木氏	鈴木氏	鈴木氏	鈴木氏	鈴木氏
岡田氏	川奈氏	吉東氏	安東氏	保東氏	鈴木氏	鈴木氏	鈴木氏	鈴木氏	鈴木氏	鈴木氏	鈴木氏	鈴木氏	鈴木氏	鈴木氏	鈴木氏	鈴木氏	鈴木氏	鈴木氏	鈴木氏	鈴木氏	鈴木氏
岡田氏	川奈氏	吉東氏	安東氏	保東氏	鈴木氏	鈴木氏	鈴木氏	鈴木氏	鈴木氏	鈴木氏	鈴木氏	鈴木氏	鈴木氏	鈴木氏	鈴木氏	鈴木氏	鈴木氏	鈴木氏	鈴木氏	鈴木氏	鈴木氏
岡田氏	川奈氏	吉東氏	安東氏	保東氏	鈴木氏	鈴木氏	鈴木氏	鈴木氏	鈴木氏	鈴木氏	鈴木氏	鈴木氏	鈴木氏	鈴木氏	鈴木氏	鈴木氏	鈴木氏	鈴木氏	鈴木氏	鈴木氏	鈴木氏

當座帳

▽傍島出雲氏 綾秀會々長に就任。  
 △山田壽瓢氏 元綾秀會々長山田壽瓢氏は同會の顧問となる。  
 △高田駿若氏 大阪府下中河内郡枚岡町額田十一番地へ轉居。  
 △岡田蝶花形氏 「國姓爺合戰引用詞句出所に關する考案」を同好者へ頒布。  
 △豊竹呂太夫師 大阪市南區大寶寺町西の町一六番地へ移轉。なほ同師は文樂座の名古屋打上げ後大連より北京方面へ旅行。  
 △竹本旭勝師 大連の竹本旭勝師は今秋斯界を隱退。  
 △豊澤廣二師 浦戸丸遭難の際奇蹟にも厄難を免かる。  
 △豊澤扇之助師 二月よりの病氣漸く快方に向へし處、六月人力車より落ち右肩を痛め久しく休養中や、良好。

計報

須田美義氏 本誌名譽會員須田美義氏は三月より病臥加療中の處六月遂に永眠。  
 野澤勝之介師 野澤喜左衛門々々野澤勝之介師は(本名田川貞雄)南方で四月十一日戰死。享年二十九。文樂座太夫三味線中初めての戰死。  
 哀悼の意を表す。 太棹社

編輯後記

☆本號には土門拳氏の御寄稿を戴きました。齋藤拳三氏からは文樂評が長くなるといふので其半分だけが届きました。それに紅雨莊主人氏の「師弟道」伊藤紅二氏の「忠臣藏スパイ」川口氏の「端場の研究」で本號の本文は頗る賑ひました。  
 ☆端場の研究には、齋藤清二郎畫伯にお願ひして挿繪を入れる事にしました。事は前號に豫告致しましたが、氏の快諾を得まして本號には御覽の如く六角堂外三葉を入れ、又カットもいたゞきましたので題字を星野桔梗氏にお願ひ致しました。

☆今夏も大分淨曲温泉行をお企ての諸賢があるやうですが、語り物や盛況など御一報を願ひます。  
 ☆本年は青森、新潟地方から北海道の雪國が反對に猛暑ださうですが、東京方面も遅れ走せに暑つさが厳しくなりました、皆様の御健康を祈ります。(八月五日)

富取生

第百四十六七合本		定 價	
一月分金	五圓	一部金	五十圓
六月分金	三圓	郵税共	郵税一圓
一年分金	五圓	郵税共	郵税一圓

昭和大年八月五日印刷納本  
 昭和六年八月五日發行  
 東京都小石川區音羽町一ノ二  
 編輯兼 富取壽鹿  
 發行人 富取壽鹿  
 東京都小石川區指ヶ谷町四  
 印刷人 杵淵五郎  
 東京都小石川區指ヶ谷町四  
 印刷所 柏葉社  
 東京一三八三  
 東京都小石川區音羽町一ノ四  
 發行所 太棹社  
 振替東京三一七八五番

北關	安岩	同藤	同宮	同飯	同西	同久	同石	同諏	同渡	同山	同加	同古	同田	同行	同榜	同國	同小	同鈴	同保	同安	同吉	同大	同神
京東	崎藤	同松	同川	同原	同貝	同保	同井	同訪	同邊	同本	同賀	同中	同島	同行	同島	同森	同島	同中	同木	同良	同東	同川	同大
關崎	長山	同松	同宮	同飯	同西	同久	同石	同諏	同渡	同山	同加	同古	同田	同行	同島	同森	同島	同中	同木	同良	同東	同川	同大
門氏	門氏	門氏	門氏	門氏	門氏	門氏	門氏	門氏	門氏	門氏	門氏	門氏	門氏	門氏	門氏	門氏	門氏	門氏	門氏	門氏	門氏	門氏	門氏

聖 戰 完 遂

序 文 谷崎潤一郎  
豊竹古鞠太夫  
齋藤清二郎 著

# 文樂首かしらの研究

B列五號 原色版六葉  
單色版五八頁 本文二〇〇頁  
定價拾圓三拾錢 送料四十五錢  
特製本拾五圓五拾錢 送料四十五錢

本書は人形淨瑠璃、特に文樂の人形の首かしらについての最初の研究書である。眞の文樂の鑑賞は人形首かしらに關する知識なしには不可能であるが、著者は多年文樂首かしらの研究に没頭、未開拓の分野に對する完全なる研究に成功した。かかる研究はなかく一朝一夕に出来る仕事ではない。この書は將來首かしらに關する底本になることは、絶對に間違ひないところである。

加ふるに輯載せる圖版、原色版及び文樂首分類表によつて、本書の價値を決定的のものにした。

特製本著者署名御希望の方は著者宛（振替大阪二八〇四三）御申込のこと。

東京 アトリエ社刊行

東 都 聲 義 會  
會 長 齋 藤 山 生

事 務 所

淺草區柳橋一丁目一五  
齋 藤 金 太 郎 方  
電話淺草一八九一番

聖戰完遂

十喜和會

顧問

豐澤廣助 齋藤山 纈田坂 牧上本 藤素梅 山紫義玉 桔淡素梅 蝶昇鳳梗路鳳月

(俳號イロハ順)

事務所

山田方(電話墨田〇四七三番)

聖戰完遂

淨聲會

顧問

齋藤山 魚纈山川乃林竹橋 藤崎纈田田村 內本 山美紫義二乃林土梅 三 佐 生福蝶昇樂菊昇光月

(俳號イロハ順)

事務所

山田方(電話墨田〇四七三番)



聖 戰 完 遂

中 老 會

和田 春和 電話根岸一一五二番  
 田中 吞笑 電話長者四六一〇番  
 緒方 千晴 電話大塚〇五三七番  
 井上 巽 電話墨田二一五七番  
 氷野 昇 電話根岸五〇六五番  
 原田 越巴 電話京橋三九九一番  
 坂本 あるを 電話淺草八七八二番  
 星野 桔梗 電話芝一八七五番

淺田 奇聲 電話茅場三五五五番  
 三並 義昌 電話大森二六九四番  
 高瀬 操 電話澁谷三〇四二番  
 桑原 美峰 電話大塚二四九〇番  
 平山 平茶 電話四谷七二四一番  
 松岡 茂里雄 電話淺草三三五七番  
 沼井 盛鶴 市川市市川一ノ四六

事務所  
 淺草區千束町二ノ一九〇  
 電話根岸一一五二番

聖 戰 完 遂

仲よし會

齋藤 稻華  
 金子 里松  
 鈴木 美松  
 關口 一樂  
 關口 以與子

關口 一樂  
 關口 以與子

京橋區京橋一ノ九  
 電話京橋一九一七番

謝感に勳武るた々赫の軍皇

夫 太 義

# 翼會

中 村 白 猿

大 用 大 嘉 津

篠 倉 山 門

横 井 三 由

豊 澤 猿 藏

日本橋區蠣殻町一ノ六  
電話茅場町一九二七番

(イロハ順)

謝感に勳武るた々赫の軍皇

# 綾之助會

會 員 一 同

淺草區柳橋二丁目七番地  
電話淺草(84)七三五九番

聖 戰 完 遂

義 松 會

豐	豐	孔	中	松	片	淺	柳	田	三
澤	澤		村	野	倉	居		中	口
松	松		小	登	松	日	有	司	松
四	造	雀	六	昇	嘉	の	明	若	藤
郎					出				

聖 戰 完 遂

都 太 夫 連

葛	田	小	岡	大	飛	西
和	中	澤	崎	熊	石	村
都	湖	久	都	都	かなめ	喜
玉	月	春	洲	仙		光

(イロハ順)

竹	平	安	安	福
本	野	藤	藤	永
都	都	都	都	都
太	平	昇	竹	樂
夫				

小石川區富坂二ノ十一  
(電車富坂二丁目 忠靈塔前)

謝感に勳武るた々赫の軍皇

曲淨  
梅

鉢

會

女

天

會

事務所 本所區向島須崎町八六番地  
(黒川叶方) 電話墨田五〇六八番

事務所 本所區向島須崎町八六番地  
(黒川叶方) 電話墨田五〇六八番

遂 完 戰 聖

會 聲 墨 島 向

○ ○ ○  
京 山 島 乾 高 太 黑 仁 末 島 小 芝 山  
極 田 ; 光 田 川 木 廣 森 田  
辰 義 つ 桔 吳 共 翠 花 春 叶 小 久  
和 加 昇 不 梗 光 樂 叶 松 枝 榮 昇 柳 松

○ 印 世 話 人  
事務所 本所區向島須崎町七四  
山田義昇方 電話墨田〇四七三

會 表 發 曲 古 夫 太 義

豐 豐 鶴 豐 豐 豐 鶴 豐 竹 豐 豐 竹  
澤 澤 澤 澤 澤 澤 澤 澤 本 竹 竹 本  
芳 松 絃 和 扇 美 絃 猿 卯 巴 駒 朝  
太 市 之 之 喜 太 太 登 見 太  
郎 郎 內 孝 助 助 吾 知 夫 夫 夫 夫

深川區清澄町三ノ六  
電話本所四〇八一番

謝感に勳武るた々赫の軍皇

# 巴 津 天 會

會長 寶藏寺天昇

相談役	宮島和紅
常務理事	武藤壽昇
事務長	長谷川勇昇

顧問

竹本巴津昇

事務所

杉並區和田本町九五一  
竹本巴津昇方  
電話中野五七九三番

謝感に勳武るた々赫の軍皇

# 靜 淨 會

事務所 本所區向島須崎町八九(竹本越駒方)  
電話墨田七五三八番

竹本綾之助

鶴澤清一

謝感に勳武るた々赫の軍皇

# 會 扇 翼 曲 淨

豐	三	三	歸	行	近	藤	黑	岡	德	原	池
澤	浦	谷	山	田	藤	代	川	田	永	喜	澤
扇	美	歸	い	茂	一	彌	靜	久	翠	壽	鶴
之	扇	谷	世	る	玉	光	叶	聲	翠	壽	鶴
助	華	古	花	は	玉	光	叶	聲	翠	壽	鶴

本所區向島三丁目二五  
電話墨田二八八番

(イロハ順)

# 會 鵠 鸚

豐	豐	鶴	竹	竹	竹	竹	豐
澤	澤	澤	本	本	本	本	竹
猿	清	綱	小	染	土	春	網
幸	芳	助	仙	登	佐	華	昇

事務所

澁谷區金王町九

(竹本染登方)

昇登改メ

謝感に勳武るた々赫の軍皇

# 會 み つ か

鶴	里	喜	喜	蝶	叶
澤					
勝			ら		
助	芳	勇	く	花	

# 會 聲 芳

豐	清	千	茂	一	朝	辰	里
澤							
芳	芳	壺	雄	重	日	壽	芳

深川區清澄町三ノ六  
電話本所四〇八一番

(イロハ順)

聖 戰 完 遂

相生會

會員一同

會員岡野芦鶴

宮内ほくら

京橋區京橋二ノ八  
電話京橋 八〇三三七番  
八〇六五番

聖 戰 完 遂

團 市 會

江	鈴	南	歸	久	緒	宮	蛭	橋	坂	吉	廣
原	木	條	山	保	方	内	子	本	井	田	瀨
清	靜	壽	歸	田	千	ほ	三	三	市	い	る
			世	太		く				る	は
昇	壽	光	花	平	晴	る	錦	司	一	紫	は

本郷區湯島四ノ三

野澤 語左衛門

野澤 道之助

豊 和 孝  
む つ み 會

謝感に勳武るた々赫の軍皇

本  
城  
冠  
之

柳  
有  
明

森  
市  
菊

中  
島  
新  
華

柴  
野  
筑  
波

水  
野  
昇

謝感に勳武るた々赫の軍皇

中  
澤  
巴



謝感に勳武るた々赫の軍皇

乃  
村  
乃  
菊

高  
瀬  
瀬

伊  
藤  
松  
鶴

謝感に勳武るた々赫の軍皇

兜會々長  
近江清華

謝感に勳武るた々赫の軍皇

東都五十義會々長

細川清

本所區東兩國二丁目四  
電話本所〇八一八番

謝感に勳武るた々赫の軍皇

田中湖月

本宅 豐島區千早町一ノ三〇  
別莊 茨木縣銚田町  
電話銚田一三八番

東京不動產通信社

社長 岩田幸左衛門

(號) 未成

東京市芝區西久保櫻川町廿四番地  
電話芝(43)一八四〇番

謝感に勳武るた々赫の軍皇

安藤どくる

(御芳名掲載順不同)

謝感に勳武るた々赫の軍皇

星野桔梗

緒方千晴

繪解芝居追々出來ます。御利用を願ひます。

太十、壺坂、合邦 東京市日本橋區吳服橋二丁目三

揚屋、柳、寺小屋

忠五、忠六、野崎

其他

奥村鑛業所

奥村三玉

電話日本橋 24) 〇九三四番

皇軍の赫赫たる武功に感謝謝

長谷川文久

吉田三芳

高瀬操

安藤光樂

(イロハ順)

皇軍の赫赫たる武功に感謝謝

徳永静翠

事務所 京橋區銀座六ノ四

電話銀座(57)一九九五番

謝感に勳武るた々赫の軍皇

京濱素義聯盟會々長

國友東光

增田喜城  
增田喜香

女歌舞伎 坂東勝治劇身振舞踊協會

座員一同

太夫元 魁家廣丸

事務所 東京府下吉祥寺二七四三 電話吉祥寺五〇番

謝感に勳武るた々赫の軍皇

和田金扇

吉田登盛  
豊澤猿昇

及川旭

謝感に勳武るた々赫の軍皇

鈴木松寶

謝感に勳武るた々赫の軍皇

日本橋區矢ノ倉町十四番地

山下彌生

電話浪花三四一〇番

井上巽

湯淺光玉

謝感に勳武るた々赫の軍皇

松  
岡  
語  
松

白  
井  
清  
華

武  
笠  
吉  
樂

謝感に勳武るた々赫の軍皇

金  
子  
里  
松

河  
野  
國  
聲

米  
澤  
雅  
樂

謝感に勳武るた々赫の軍皇

平塚市

國 森 鳴 門

三 並 義 昌

日本義太夫因會  
男子部一同

事務所

赤坂區田町六丁目四番地

電話赤坂三〇四七番

謝感に勳武るた々赫の軍皇

鈴木兒雀

保谷紅司

坂倉素遊



謝感に勳武るた々赫の軍皇

淺田奇聲

平井榮

寺岡三幸

平山平茶

川口子太郎

吉川浪補

謝感に勳武るた々赫の軍皇

坂本あるを

藤本喜鳳

松岡茂里雄

野田高尾

江原清昇

青山和曉

和狂改メ

謝感に勳武るた々赫の軍皇

<p>大 築 葵</p>	<p>大用大嘉津</p>	<p>的野關路</p>
<p>西 源 綠</p>	<p>菊地秋月</p>	<p>野口みなと</p>

遂 完 戰 聖

<p>中島古平</p>	<p>龜田松花</p>	<p>高橋東好</p>
<p>河守痴樂</p> <p>目黒區上目黒五ノ二三四一 電話澁谷三八六五番</p>	<p>義鸚鵡會 佐野紫雀</p>	<p>濱野若狸</p>

謝感に勳武るた々赫の軍皇

齋藤正鳳

水戸部いづみ

高橋可遊

小川都山  
小川都川

廣瀬いろは

歸山歸世花

遂完戰聖

岡田蝶花形

豊島區千早町二丁目三七  
電話落合長崎三〇四七番

結婚報國出雲會々長  
竹本綾秀會々長

傍島出雲

川口市本町二丁目一ノ七  
電話口川口二四〇八番

三好會森三好

本宅 岐阜縣武儀郡菅田町  
寓居 東京都小石川區水道端町一ノ二二  
義太夫練習所 都電東五軒町下車(寓居)

聖 戰 完 遂

竹本素女會

義女若女會

竹本素女

芝區西久保巴町四一  
電話芝(43)二五七七番

聖 戰 完 遂

錦 錦 松

御料理二葉

錦さと  
深川區白河町一ノ六  
電話本町二六五番

竹本重之助

素鵲會 三味線

語からす會 野澤語作

謝感に勳武るた々赫の軍皇

區六園公草淺

義太夫座

電話淺草(84)三六三〇番

橘館

電話淺草(84)一五九八番

竹本駒若

自宅 淺草區田島町三九番地

日本義太夫因會

女子部一同

事務所 芝區巴町四一番地(竹本素女方)

電話芝(43)二五七七番

女優身振劇

竹澤龍造一座

座員一同

竹澤龜次郎

謝感に勳武るた々赫の軍皇

皇軍の赫赫たる武功に感謝謝

長野市岡田町

田中 和國

別府市濱脇足達病院

足達 延壽

電話 一五八七番

② 郵船組 岩崎 虎一

山 彦

安東市北一條通四丁目一七 電話二三〇八番

皇軍の赫赫たる武功に感謝謝

加藤 壽松

静岡市南町一丁目七

神戸市須磨區西垂水町

岡田 源 西村 紫紅

大阪市東區兩替町一丁目二三

京城府日ノ出町一三

志岐 紫扇 吉岡 十八公

大垣市城畔

皇軍の赫赫たる武功に感謝

日本因協會

大阪市南區竹屋町一七

旭勝會

大連市信濃町四一  
電話二、七〇七五番

滿洲國安東市

金桶暉鳳

船橋市五日市

川奈部銀司

皇軍の赫赫たる武功に感謝

古賀大彌

營業所 八幡市通町十六丁目

電話 一八四八番  
一五六〇番  
二七〇七番  
二四六六番

自宅 八幡市紙屋町一丁目

電話 一一七四番

谷岡若葉

福岡縣福岡町

加藤兜

名古屋市中區南桑名町三ノ三

佐藤和聲

濱松市鍛冶町一三五

謝 感 に 勳 武 る た 々 赫 の 軍 皇

太 棹 社

富 取 壽 鹿

柏 葉 社 印 刷 所

杵 淵 五 郎

小石川區指ヶ谷町四  
電話小石川一五二三番(呼)

謝 感 に 勳 武 る た 々 赫 の 軍 皇

製 函 ・ 製 材 ・ 土 木 ・ 建 築  
運 送 ・ 勞 力 供 給 ・ 演 藝 部 業

籠 寅 商 店

保 良 鈴 鳳

出 張 所 (東京、横濱、名古屋、京都、大阪、  
神戸、廣島、小野田、門司、戸畑)

本 部 下 關 市

電話一七二二番、 三二九〇番、 二八四八番  
運送部(代表)長四二番、 製函部(代表)〇七一七番  
建築部(代表)一四七六番、 演藝部(代表)二四六六番



食慾増進  
万有調味

料理の味をよくする

# チキンソース



東京チキンソース株式会社

昭和十八年八月廿三日 印刷納本  
昭和十八年八月廿五日 發行

（毎月一回  
廿五日發行）

大棹（第百四十六、七號合本）

（定價五拾錢）